

「其れから松崎君、君に、頼むで、肴と酒を送った人に、何うか澤山お禮を云つてくれ給へ。」

『可、確に云つて遣らう。』

『其れぢやア頼むだよ。何れ皆様には、更めてお禮をするよ。松崎君失敬。』と云ふや否、盛乎と立上つて辰雄の兩眼は、凄く血走つて、五分刈の頭髪の毛は、一箇々々立上つて見えるのである。一座の視線は注がれた。

俊吉も辰雄を仰ぎながら、

『早歸るかね、まア可いではないか、』

と云ふのを耳にも入れず、辰雄は省三郎の方を下瞰して、

『小父様、否、坪井省三郎様、學士先生になり損つた市役所の小僧なんかは、這麼特別の響應をしてくだされまして實にお禮の申様もございません。私は未此の上に、種々と御馳走に預りたいですが、最う満腹になつて、一秒も此の席に居る事が出来

ないですから、甚相済みませんが、今晚はこれで失禮いたします。』

『折角来てくれたのに、一向構はないで、何うも氣の毒だつた。其れぢやア又お出、』と省三郎は冷笑した。

抑ふべからざる憤怒の相を顯はして、省三郎が嘲の挨拶を聞いて居た辰雄は、『難有うございます。坪井様、實は此所で今日のお禮を申す筈でございますが、格別結構な響應に預つたものですから、傳手なんかでは失禮です。此のお禮には更めて上る事にいたします。』

と云つて置いて、其の瞳を流るゝが如く満座に注いで、

『諸君、下らん奴がお邪魔に出で、諸君の興を害しましたのは、寔に一言の申譯がございませぬ。何うか幾重にも御容謝を願ひます。これで邪魔者は諸君の目の前を離れますから、跡で充分に歡を盡されんことを希望いたします。』と會釋する間もなく、衝と背向になると、早、片手を襖、力にまかせて颯と開けた。襖の彼方に人こそあれ。不意を喰つて左右に飛退き、忍音ながら、

「あれッ。」

『あッ。』と驚天して、足並亂して玄關の奥深く、白と赤と紅の衣の綾を隠見さして逃げ行くのは、二人の女で、先なるはお松、跡は疑ひもなきお千代であつた。

辰雄は其の背後姿を睨む様にして、

『見て居たのだね、随分可い見物だつたらうハツハツハ、』と捨鉢に笑つて除けるを機掛に、襖と背後の襖を立切り、衝々と玄關先、取附の障子を一枚開けて格子戸を閉めた玄關先は、唯、人の影もない。

辰雄は居る人はないと見ると、兩手に緊乎と羽織の紐を引締めて、惣身を震はし、唇を切よと、嚙締めて我にもあらず宛然立縮の姿となつて怒らした眼を屹と睜り、空間に或物の影を睨むで居たが、

『し、失敬なッ。』と腹の底の底から絞出す様な聲を漏らすと、熱涙が颯と流れて、止途もなうに兩頬を亂れ打つのである。

少時する間もなく、辰雄は我に歸つた様で右手の拳で涙を拂ひ、折柄笑聲のドツと起つた襖の彼方を顧て、

「お、覺えて居るのだぞツ」とばかり、身を翻して庭に飛降り、足に懸つた下駄を引掛けて、突然格子戸を開けると、疾風の如く、開は綾なき門前を望むで、一瞬の内に馳せ去つたのである。

「辰雄ッ。」

其の夜も午後九時を過ぎたばかりの未宵の口。遠藤家の臺所から、老けたらしい女の聲が起ると、臺所の燈火を隔の障子に遮つた玄關の眞暗な中で、

「は、詰」と周竟た様に答へる男の聲。

臺所の聲は續いて、

「お前又何處へ行く。」

「私、私ですか。」

「あ、」

「私ですか。」

「左様さ、歸つて來早々、此方へは録々顔も出さないで、お前、其の儘又何處へ行くかね。」

「私、私ですか、私は其の何ですから、鳥渡三島君の所へ行つて來ます。」と曖昧な言葉遣をして、男は玄關の障子を開けて靜に庭に降りた容子である。

臺所の聲は強かけて、

「三島様へ行くのなら、衣服なんかも着更へて行けば可いのに。」

「なアに、鳥渡ですから、直歸つて來ます。」

と男は既に下駄を突掛た様な形勢である。女の聲は重々しく、

「何うも變だね、お前、今晚に限つて何うも變だね。」

「な、何も別にお母様、私は變つて居ないのですよ。」

「其れだつて、」

「可いのでせう。鳥渡、鳥渡ですもの、」と云ひ捨て、早、格子戸に掴まつた様である女は少しく急込むで、

「お待ちッ」と瞭然したものである。

「え。」

「鳥渡お待ち。」と云ふ聲が切れると、臺所に足音。火影揺々と動く間もなく、障子が颯と開いて、洋燈片手にお秋が顯はれた。其の火影の及ぶ所、背後を見せた辰雄が、今本町から歸つた許の姿で、格子戸を既に三寸ばかり開けて居るのである。

(三十八)

お秋は辰雄の背後姿を一眼見る間もなく、

「お待ちつたらお待ちよ。何を那麽に周章るのだね、」と心に懸る事でもあるらしい。辰雄は是に到つて、益周章しく、

「何も別に、何も別に周章る事もないのですが、鳥渡ですから、ちよッ、鳥渡、」と振返らないで、四寸、五寸、六寸、一尺ばかり。

其れと見るや、お秋は其所に洋燈を投捨る様に置いて、衝々と進むで素足の儘で庭に飛下り、既に半身を戸の外に出さうとした辰雄は緊乎と拘着いて、繊弱き腕も必死の働き、

「お待ち、辰雄、お待ちよ、」

と氣もそゝろに引戻せば、機に掛つて辰雄の足浮き、お秋も共に逡巡いて、二人は

危く倒れんとしたが、漸く立直つた。と、思ふも疾や、お秋は肝兎の如く辰雄を離れて格子戸閉乎。平然と背を着けて、呼吸を嚙し、

「辰雄、お前、ど、何處へ行く。」

と云つて、庭の中央に衝立つた辰雄の姿を背後から照した洋燈の光に透して、睨と見てお秋は打ち驚き、

「エツ、お前、エツ。」と我にもあらず聲を震はす。其れを聞くと、忽ち躊躇となつて身體の中心點を失ひ、恰、朽木を倒すが如く、玄關の椽側に腰を落した辰雄の右手には、扱けば玉散る三尺ばかりの、黒鞘の一刀が握られて居る。

お秋は女氣の途方に暮れたる吐息と共に、

「辰雄お前、何故、そ、那麼情ない心になつて、お、おくれた。辰雄、」と落涙した。

唯、ばかりあつて、辰雄も茫然自失の吐息を漏して、俯向いた儘で言葉がない。

お秋は身も世もあられず、

「辰雄お前、そ、其の状は、眞箇に、な、何と云ふ状なんだね。」

「は、諾。」

「辰雄、お前は何故、那麼心になつておくれた。お前に萬一もの事があつたのなら、跡には妾が一人子になるのも分らない事はないだらうに、辰雄、お前に萬一もの事があつたのなら、妾は何うするのだね。」

「諾、諾、お母様。」と辰雄は斷腸の涙聲。お秋は心を静めて、涙を拭ひ、

「其れもお國の爲とでも云ふのなら、女でこそあれ、妾も日本の國民だわね、何でお前を停めるものかね。」

と云つたが、心着いて、秘に戸の外の形勢に耳を傾け、若や往來の人の足を停めて聞いて居はしないかと思つたららしい身の舉動手早く雨戸を繰つて、懸鏡を掛けて置いて辰雄の傍に摺寄ながら、

「兎に角甚麼事か、座敷へ上つて、妾にも聞かしてお呉れ。」

と肩先に片手を遣つて力を籠むれば、辰雄は俯向いたなりに、

『は、諾。』と泣いたが、漸々起上つて座敷に上り、頰る様に膝を折つて、俯向くと、携へて居る一刀の鞘に、二滴三滴の涙の露お秋も續いて座敷に上り、其所の障子を閉めて、辰雄の向に座つて、

『辰雄、お前は、全躰何うしたと云ふのだね、妾にも話さないで、其の刀で何うする積なのだね、』

と不安の色を歴々と浮べて、デリ、と其の顔を覗込むと、辰雄は鬢髪を震はして、

『お母様真箇に、真箇に、相済みません。ほ、真箇に、申譯も何もありません。申譯も何もないのですが、お母様私は、』

『何うしたと何ふのだね、』

『お母様、私は、私は、お母様、私は、今晚坪井の奴等に、ふ、侮辱されました。亡くなつたお父様の名迄も持出されて、侮辱されました。侮辱されたのですとばかり、』

り、辰雄は涙に濡れた顔を上げて、お秋を見ながら刀持つ手を震はして、男泣の聲を飲むだ。

(三十九)

お秋は亡父の名迄擧げられて侮辱せられたと云ふ辰雄の言葉を聞くと共に、めきめきと痲癢筋を顯して、

「な、何とお云ひだ。坪井がお前を、お父様の名迄持出して辱を搔かしたと云ふのかい。彼の坪井の畜生が、」

と息巻けば、辰雄も無念の齒嚙をして、

「お母様、わ、私は、残念で溜らないですと沈痛禁じ能はざる趣あり。」

お秋の腫は益耀いて、

「残念つて何うしたのだね、甚麽事を云つて辱を搔かしたね、」

「甚麽事つてお母様、これも私の馬鹿からですが、實に私は馬鹿です。這廩馬鹿です。親の名迄持出されて馬鹿にされます實に馬鹿です。馬鹿ですがお母様、私

は實に無念です。」

と辰雄は恰虚空を掴むが如き手着で、

「其れですからお母様、私は坪井の奴を一刀の下に叩き切つて、此の怨恨を晴して遣らうと思つたのです。お母様、これと云ふのも、私がお母様の言葉に反いて、お千代に心を残して居たからです。實に馬鹿です申譯がございません。」と身悶すお秋は稍慰顔になつて、

「何も那廩に云はなくつても可いわね、お前がお千代に心を残して居るのに、何も不思議な事はないぢやないか、妾だつて左様だわ、口先では種々と云つたもの、實はお千代に心を残して居るのだわね、其れを彼廩に云つたと云ふのは、親仁が親仁だから、譬お千代に来る腹があるにしろ、親仁か何うしたつて嫁さないだらう。其れよりか今の内に、お前の心を外に遷して置いたのなら、先で厭な思をさせなくつても可いだらうと思つたからの事だわね、申譯も何もあるもんか、其れよりかお

前、坪井の奴が、お前に甚悪事をして、お前に辱を搔したのかい。」

「甚悪事つてお母様、眞箇に濟まない事ですが、私はお千代の腹を聞いた上で、お千代の腹さへ確乎して居たのなら、無理からでもお母様の許可を得たいと思つたものですから、遂に此の間、お千代に手紙を送つたのです。私の今晚坪井に行つたのは、其の返辭を聞くためでした。所が其の手紙は満座の中で投返されました。投返された許でなく、お千代の命令だと云つて、頭から酒を浴せられました。其上小父様からは、盃を投付けられました。其の外小父様の部下からは聞くに堪へない嘲弄を受けました。其れと同時に松崎からはお父様、名迄擧げられて、大、侮辱されました。お母様、私は、無念です。殘念です、殘念で溜らないです。」

「那麽事を、え、那麽事をされたのかいッ、」

「え、されました。されました、お母様。」

「ま、眞箇に、何と云ふ人達だらう。其れでもお前、よつく忍耐をして歸つておく

れだね。」

「否お母様、幾何私が無神経だからつて、何うして忍耐が出来るものですか。私は忍耐が出来ないです。忍耐が出来なかつたものですから、最初は佐野とか何とか云つた小父様の部下を縁から下へ投飛ばして遣つたのです、が、先方は大勢ですから、容易な事では行かないと思つたのですから、お母様、こ、これを、」

と辰雄は怒氣を含ひだ眼光を黒鞘に遣つて、
「お父様が秘藏にして居ましたのを、取りに歸つたのです。お母様、何うか更めて私にお暇をください。え、お母様。」

「えッ、」

「亡なつたお父様は素より、お母様に對しては、不孝此上もない事ですが、お母様、私は、私は、實に、さ、殘念で溜りません、」

と辰雄は那邊を睨詰めて、衝と片膝を立てるに刀を杖。お秋は身も世もあらぬ身

を擦寄せて、

「其れやア尤だ。尤だが辰雄、妾は、わ、妾は、何うなるのだね。」と絶着いて、

聲は涙に消えた。辰雄は袴と胸を打れた様で、少時は言葉なく、仰向いて一刀を握つたなりの手を震はして居る門口を軽く叩いて、

「遠藤君。遠藤君。」と訪ふは確に三島寛藏、辰雄の膝は頹れたのである。

(四十)

其れと聞くよりお秋は起上つて、溢落る涙を拂ひながら、

「おや三島様、丁度可い所へ、何うかお這入くださいませ。」

と、早、玄關の障子を啓けて、庭に下り、倉皇しく駒下駄を衝掛て門口の雨戸。格子戸も啓けて、

「さア何うぞ、お這入くださいませ。」と片寄つた。

戸の外で會釋して、

「や、何うも。」

と這入つて、何か事あり氣なお秋の涙顔を鳥渡見た寛藏は、不審の眉根を寄せて、

「遠藤君は居ますか。」と聞く。

お秋は彼方を願て、

「はい、其所に、」

「左様ですか、」

とお秋の願た方を尻と見ると、其所には身も心も悪戯となつて剣を執つて辰雄が聲なく躊躇つて居る意外の光景に、寛藏も呆然として、衝立つた儘で居る。と、跡を締めて取つて返したお秋は、寛藏の耳近く、

「三島様、まアお上りくださいませ。實は今も、貴君にお出でを願つて來やうと思つて居た所なのです。どうかお上りくださいませ。」

「左様ですか、其れは丁度可い所だつた。」

と云つて、寛藏早速上つて座を締れば、續いてお秋も座に上つて、辰雄に對して鼎足を保ちながら、

三島様、這處所をお目に掛けましては眞箇に濟みませんが、と涙を拭ふ。

其れには眼も呉れず。寛藏は、辰雄の顔色舉動、黒鞘を胸して、

「遠藤君、何うした。其の状は。君には似合はない事ぢやないか、何事かね、」

「三、三島君、三島君。三島君僕ア、」

と應じた辰雄は、尻と寛藏の面を仰いで、

「三島君僕ア、僕ア、坪井で侮辱された。其の怨恨を晴す積で、出て行く所を母に停められたのだ。三島君、僕ア、僕ア、残念だ。無念だ。三島君ッ、」

と口惜しがるに、仔細は知らねど寛藏は、思當る節なきにあらす。

「何、侮辱。左様か、坪井が君を侮辱したと云ふのかね、うむ。」

と眼を睜つて、

「甚麽事をして君を侮辱した。」

「甚麽つて言語同断だ。三島君、豫部下のものに其の意を得たしてあつたのだらう。

僕を見ると部下の奴が嘲弄をはじめるぢやないか、で、僕が其の中の一人を捕まへて投飛して遣つたんだ。すると、坪井の奴が出て來て、客に無禮だ。亡狀だ。諸君

に對して謝罪せよと云ふのぢやないか、其れを僕がしないで居ると、松崎を呼んで、僕の親仁の名迄あげさして嘲弄の謝罪をさすのぢやないか、其の上お千代はお千代で、松崎の手から僕の遣つた手紙を返さした上で、僕の頭に酒を浴せさせると云ふ侮辱の爲方ぢやないか、君、三島君、僕は無念だ。實に無念だ。無念で溜らないから、僕は奴等を片端から叩き切つて、此の遺恨を晴す積だ。君、亂暴な事はないだらう。」

「うむ、雖然、那麼事をしたのかね、獸奴、」

と寛藏は唇を噛むだ。

お秋も其の尾に従つて、

「眞箇に何と云ふ人達だらう。」

「實に無念だ。三島君、お母様、僕は、」

と辰雄の無念がるのを、寛藏は我が事の様にして、

「失敬だ。實に失敬だ。那麼事をしたのか實に言語同斷だ。手紙の一件は。密に僕も懸念する所があつたものだから、今日も君に盟つた様な譯なのだが、實に失敬な那麼事をしたのか、君の怒るのも無理はないさ、其れぢやア件の手紙が導火線となつたのだね、」

「左様だらう。僕は無念だ。實に、む、無念だ。」と辰雄は半我を忘れて居るらしい。

寛藏はシゲく辰雄の顔を打守つて、

「尤だ。察する、失敬だ。君の怒るのは尤だ。八裂にしても足りない奴だ。足りない奴だが遠藤君、人を殺すものは死すだ。鉛と銀との釣替は惜しいぢやないかね、其れも可いとして、君に万一の事があつたのなら、お母様は何うして今日を送つて行くかね、」

と云つて、其の眼光をお秋に遣れば、お秋は其れに力を得て、

「左様ですわ。今も妾が云つて居る所ですわ。眞箇に、これに万一の事があつたのなら、妾は何うするのでせう。ねえ三島様、」

辰雄はかくと聞いて、

「實に、實に、お母様には濟まないます。」

と俯向いた。

寛藏は引取て、

「其れだから遠藤君。君も如何程腹が立つても、短氣な事をしては不可ない。」

「眞箇に左様でございます。』とお秋の顔色は稍平生に復して居る。」

「其れかつて、」

と辰雄の黒鞘の小尻衝立つる折柄、門口に足音して、

「遠藤様。遠藤様。」と甲高に訪ふ聲。

三人は言葉を切つた。

言葉を切つたお秋は、臆て、

「誰。誰。誰人様でございます。」

と何気なき躰を装へば、

「未お休みぢやアないのですか、遠藤様。お嬉ひなさいませ。愈召集になりまし

たぞ、

「やッ、召集、召集か、これは目出度う。」

と寛藏が大聲をすると、

「えッ、」とお秋は眼を睜る。

辰雄も不思議、刀を取落して、

「召集、召集、うむ、召集、と獨言をする、

「早くお開けなさい。召集状をお渡しいたします。」と外なる聲は勇ましい。

お秋は突然起立つて、

「それぢやア辰雄が、召集になつたのでございますか、兵筒に召集になつたので

ございますか、

と庭に下り、門口を啓けて、

「何うも御苦勞様でございます。」

と會釋する間もなく、提灯片手に白木綿の袋を首に懸けた、瘦せた四十路許の男が、

「や、何うも。」

と這入つて、お秋の前に一禮して、

「私は市役所の使丁で、何時も遠藤様には御厄介になつて居ますものでござい

ます。」

と恭しい。

「あ、左様でございますか、其れぢやア辰雄も御厄介になりましたのでございませ

う。さア、何うかお上りなさいませ。」

「難有うございますが、未これから行かなくちやア不可ない所でございますから、
これで失禮いたします。遠藤様は最うお休みでございますか、と提灯を胸先に寄せ
て、赤々とした光に照して、早速片手を袋に遣つて、勇ましく取出したのは、大き
な桃色の封筒に入つた召集状である。」

お秋は家内を願て、

「否、其所て話して居ましたものですから、何うも御苦勞様でございました。」

「何ういたしましたして、其れぢやア、」

と使丁は初めて玄關の内を見入つて、衝と寄ると、

「遠藤様、お嬉ひなさいませ、召集状が参りました。實に名譽でございました。」

「あゝ、山下様ですか、これは何うも御苦勞様でした。」と云つて、寛藏の背後を擦々に敷居邊に來た辰雄の眼は充血して、不安の色は動いて居るが、總に於て平穩になつて居る。

辰雄の危座を見ると、使丁は片手を延へて、

「其れぢやア確にお渡しいたします。」

と桃色の封筒を差出すのを、

「あゝ、確に受取りました。」と辰雄は恭しく受けて、其の表面を腕と見た。

使丁は小腰を屈めて、

「未三軒許ありますから、今晚はこれで失禮いたしましたして、此のお喜には更めて上ります。何うもお邪魔でございました。」

「あゝ左様ですか、其れぢやア最うお留いたしません。何うも御苦勞様でした。」

「何ういたしましたして、其れぢやア、」とばかり、一禮して使丁は背向になり。庭の小暗に立つて居るお秋に會釋を呉れて、早々と歸つて行く

(四十二)

使丁が歸つた跡。令狀片手に故の座に歸る辰雄の正面から、

「君、實に名譽だ。獸なんかを敵手にして喧嘩なんかをして居る場合ぢやないよ。實に名譽だ。」と云つたものは寛藏である。これに對して、

「あ、」

と應じた辰雄は、何か大なる感慨に耽つて居るらしい様があつた。所へ跡を締めてお秋が這入つて来て、

「辰雄。」

「諾。」

「お前の身軀は、最う自分で、自分のものではありませんぞ。」

「諾。」と辰雄は黙然として聞いて居る。

お秋の顔には一段の生氣を加へて、

「辰雄。這麼事なら、妾は甚麼に辛つても嬉むでお前を遣ります。お前は其の刀で、彼麼畜生なんかを斬る事は止して、我が國に敵對する露西亞の敵を斬るが可い。幾何辱を掻かされて、生甲斐のないものになつて居ても、御國の爲には生れ替つた心にならなければ不可ないよ。ねえ三島様。」

「左様ですとも。」

と云つて、寛藏は辰雄に向ひ、

「遠藤君。今お母様の云つた通りだ。人事の錯雜に死むでも、國家の爲に蘇生し給へ、それが國民の本分だ。」

「左様だ。」

と辰雄は黙然として、

「左様だ。僕が悪かつた。種々と心配を掛けて濟まなかつた。お母様も安心してく

「ださい。辰雄は正しい思に生きて、國家の爲に盡します。」
と手早く封筒を切つて、令狀を取出し、少しく身を斜にして、ひたと辭つた洋燈の光に透しながら、

「何、十二日の午前十一時迄、其れぢやア今日が土曜だから、月、火、水曜に入營しなくちやアならないのか」と云い放つた辰雄の聲は、其れは深いものであつた。唯見る、遠藤家の門口には、常盤木を用ひて造つた緑門は、交叉した二流の國旗に午後一時頃の日影が漂ふて、あるかなさかの風心地好く、往來は何となく景氣立つて居る。

折柄一隊二百人許の兵士あり。喇叭の音に連れて、隊伍肅々と上から下の方へ向つて通ると、砂煙が朦朧と起つた。其の煙に乗つて來た様に、今しも件の緑門の下に顯れたのは三島寛藏である。

寛藏は鳥渡緑門を打仰いで、何か物思の顔をしたが、其の儘歩を轉して、格子戸を

開け、

「遠藤君。」

と呼べば、

「あつ、三島君か」と答へて玄關の障子を啓け、欣々と立願はれた辰雄は、昨夜とは殆外人の様であるが、思倣か眼は充血して、頬の瘦目立ち、無名老人の所謂死相が顯はれて居る。

躰て寛藏は四疊半に通された。座が定まると、辰雄は先口を切つて、
「君先刻は劇甚く御厄介をかけて濟まなかつた。僕丁度市役所の方へ行つて居たものだから、お手傳も出来なかつた。」と言葉は何となく物淋氣である。
寛藏は元氣よく、

「否、何うした。其れで役場の方は都合よく行つたかね。」

「あゝ、市長が僕の境遇を知つて居るものだからね、至極都合が可い。僕が居なく

なつても、給料の二分の一を給して呉れる様にしてくれただから、僕も安心して従軍が出来ると云ふものだ。』
『左様か、其れは可い。僕も失敬だが、其の事について、密に君の爲に心配したものだから、其れでね、』
『君には何から何まで心配をかけて済まないね。』と辰雄は心から禮を云ふのである。

(四十三)

寛藏は、染々と禮心の辰雄の言葉を打消して、

『那麽事があるものか、未種々と話したい事もあるがね。其れは後刻として、先要件を云つて置う。外でもないがね、其れは町内一同のものだがね、君の名譽の入營を祝したいからつて、僕が選ばれて、其の招待方に来たと云ふ次第だが、何も御馳走はないが、町内一同の志を汲むで、今日六時から、春風樓へ来て呉れ給へ。』
『難有う。種々御厄介を掛けて居る上に、那麽事をして貰つては實に済まないね、市役場の方は市役場の方で、明日送別をしてくれると云ふし、實に済まない。何うも難有う、其れぢやアお言葉に嬌垂るとせうか、町内の諸君には君から可しく云つて置してくれ給へ。』

『可いとも、其れぢやア必らず出席してくれ給へ。』

なつても、給料の二分の一を給して呉れる様にしてくれたから、僕も安心して従軍が出来ると云ふものだ。」

「左様か、其れは可い。僕も失敬だが、其の事について、密に君の爲に心配したもので、其れでね。」

「君には何から何まで心配をかけて濟まないね。」と辰雄は心から禮を云ふのである。

(四十三)

寛藏は、染々と禮心の辰雄の言葉を打消して、

「那麽事があるものか、未種々と話したい事もあるがね。其れは後刻として、先要件を云つて置う。外でもないがね、其れは町内一同のものだがね、君の名譽の入營を祝したからつて、僕が選ばれて、其の招待方に来たと云ふ次第だが、何も御馳

走はないが、町内一同の志を汲むで、今日六時から、春風樓へ来て呉れ給へ。」

「難有う。種々御厄介を掛けて居る上に、那麽事をして貰つては實に濟まないね、市役場の方は市役場の方で、明日送別をしてくれると云ふし、實に濟まない。何う

も難有う、其れぢやアお言葉に嬌垂るとせうか、町内の諸君には君から可しく云つて置してくれ給へ。」

「可いとも、其れぢやア必らず出席してくれ給へ。」

「難有う。其れからね君。」

「あゝ。」

「君に少々相談したい事があつてね、今し方歸つて来たものだから、これから君の所へ出掛けやうと思つて居た所なのだが。」

「左様か、其れは丁度可い。僕で構はなけれやア甚麽事でも遠慮なく云ひ給へ。甚麽事かね。」

「難有う。外でもないがね。」

「あゝ。」

「僕の留守の一件だがね。」

「あゝ、あゝ、留守。留守の事かね、留守の事は何も心配したまふな。不及ながら僕が身に替へて世話方をするからね。」

「難有う。兎角は君の恩恵に預らなけれやアならない事だがね、其れについてだ。」

最初から心配して居た勝手向の都合は、給料の二分の一を給してくれると云ふので、其れ位あれば、母一人が生活して行く分には左程差聞る事もないだらうと想つて居るのだが、何を云つても親戚の一人もないのだからね、老母一人を置いて行くのは、何うも氣懸りで溜らない。早い話が病氣だ。病氣にでもなるのだと、忽ち黒闇だからね、那麽事を思ふと、僕の性質として、何うも安心して従軍が出来ないからね。」

「左様だ。尤だ。無理もないさ。無理もないが君、其の事なら心配爲たまふな、君のお母様の事は、僕で構はなけれやア盟つてお世話をしてみせる。」

「難有う。何うか、君、僕を救けると思つて、母の面倒を見て遣つてくれ給へ。君には是れ迄厄介の上に厄介を掛て居るから、這麽事を願へる譯のものぢやアないが、何うか僕を救けてくれ給へ。」

「無論さ。君が云はなくつても、目下の際朋友の側より云へば素よりだが、國民の義務としても當然の事だ。」

「何うか救つてくれ給へ。」

「其れで僕の考では、君の家を學びで、此所は他人に貸して置いて、お母様は僕の家に同居したなら何うかね、君のお母様と、僕の母とは、彼處に隔意のない仲だし繁は子供みたいな奴だし、君のお母様だつて、別に氣苦勞も入らないだらうから、構はなけれやア左様したら何うかね。」

「左様だ。左様願はれると僕も大に安心だが。」

と辰雄は何か懸念をして決しないので、寛藏は一目に見て取つて、

「兎に角、お母様に話してみても何うかね、君の方で構はなけれやア、僕の方は母承知の事なのだからね。」

「其れぢやア鳥渡母に聞いて見る。」
と振返つて、

「お母様。お母様。」

と呼ぶ辰雄の聲に早速應じて、

「何か御用かね。」と云つて這入つて來たのはお秋であつた。

お秋は寛藏を見るよりも、

「先刻は御厄介を掛けまして、何うも難有うございました。」と會釋する。

(四十四)

寛藏はお秋に禮を歸して、

「何ういたしましたして、」

と云つて居るのを辰雄が引取つて、

「お母様、其の上三島君初め、町内御一同から送別をしてくださるつてね、眞箇にお氣の毒ぢやアありませんか、」

「左様かね、其れは何うも、眞箇に何から何迄御厄介を掛けて濟みません。」とばかりお秋は聲を潤ました。

寛藏は片手に停めて、

「禮なんか云つて貰つちやア眞箇にお辱しい次第です。這處事は町内の義務ですからね、」

「諸、何うも、眞箇にお禮の申様もございませぬ。」とお秋は眼を數瞬いたのである。寛藏は頭を振つて、

「何ういたしましたして、」

と云つたが、突如として話を進め、

「其れぢやア遠藤君。お母様に話してみ給へ。」と眼使をする。「左様だ。」

と辰雄は其れに應じて、何事にやと耳を澄すお秋に向ひ、

「お母様、實は何です。私が入營して後に市役所の方は、何うか斯うか都合が可いになりました所で、お母様を一人此の儘にして置いて行くのは、何うも不安心で溜らないのですから、三島君の許に行つて、相談せうと思つて居る所へ、丁度三島君が見えたから、話して見ると、三島君も御親切に私の事を心配して、其の爲に來てくれたと云つてくれますものですから、何から何迄御厄介を掛けては濟まなと思

つたのですが、目下の場合、三島君に絶るより外は、誰人も力になつて貰う人があ
りませんものですから、三島君の御言葉に嬌えた様な次第ですが、」

「眞箇にねえ、」とお秋は千万無量の思を置めて居る。
辰雄は言葉を續けて、

「其れで三島君は、私の入營した後、自家の家を疊むで、お母様を三島君の許に
置く様にするが可いだらうと云つてくれるのです。私も左様出来る、安心して行
かれると思つて居るのですが、兎も角、お母様の御都合を聞いた上でと思ひまして
ね」と染々と云ふ。

寛藏も其の尾に従いて、
「小母様其の事は、私一人の考ではないのですよ。母が小母様の事を心配した上
でね、構はなけれやア左様する様に云つてみるが可いと云はれた事なんですからね。
小母様に別に御都合がありませんなれば、何うです。私の家へ同居なすつては。母

の氣質も、繁の氣質も、小母様は御承知でせう。私の方へは何も心使をなさる事
はありませんからね、小母様の御都合さへ可ければ私の方は構はないですよ。」
「其れや最う、貴郎のお母様だつて、繁代様の氣質だつて、何もかも整然と知つて
居るのですから、左様願はれますと、此の上もない事なのですが、」

とお秋は鳥渡考へて、
「何うも那摩御厄介にはなられません。」と辭退する。
寛藏は一膝進めて、

「其れも小母様の方に何か御都合がありますと強いてとは申されませんが、辰雄
君が充分私を信じて居てくれますと、小母様を私の家でお世話をいたしましたの
なら辰雄君は跡に心配が僅少になると云ふ理窟ですが、何うです。別に御都合がな
くば、私の方への心配は無用です。」と信實を面に顯はして居る。

「妾の方には都合も何もありませんが、ねえ辰雄。あんまりぢやアなからうかね、」

とお秋に願られて、辰雄は、

『左様ですわえ。』と云つて居る。

寛藏は二人の顔を昵と眺して、

『那麽遠慮は無用です。御都合があると不可ないですか、左様でなければやア、私の

言葉に従ひなさい、可いでせう。』

是に到つてお秋は、再辰雄を願て、

彼塵に云つてくだされるのだが、何うしたものだらうね、

『何うも濟まないですが、寧ろ左様願つたら何うです。其れだと私も安心して従軍

が出来ますが。』

と辰雄は心を決した状でお秋を見ると、お秋の色も動いて、

『其れぢやア三島様、眞箇に濟みませんが何うか左様お願いいたします。』

(四十五)

今日は四月の十二日、華麗に暖な朝の日影を浴て、遠藤家の門前逼しと、犇々と

詰寄せて居るのは、町内の誰人彼人て、羽織袴に中折帽を着たものもあれば、双子

づくめに雪駄履のもの。唐棧の羽織に角帯したもの。烏打帽にメリヤスの下履した

もの。頭髪を綺麗に搔別たもの。ハンケチを首に巻いたもの。片肌扱に兵事會の旗

押立て居るもの。婦人會の旗を巻いて障つて居るものもあつて、女も八九人。其

の勢凡五十人許もあるだらう。其の中にあつて、

『ね、おい、』

『左様さ。此の向ぢやア戦争は鳥渡濟みさうにもないせ。』

『濟むものかね、これから旅順口を取つて、九連城を取つて、浦鹽を取つて、ハル

ピンを取らなければやア戦争は濟まないせ。』

「左様かねえ、」

「分明つてらアね、」

「シロバトキンは何故降参しないだらうね、」

「左様かねえ、」

と真面目になつて首を擦るものもあれば、

「お前が行つて勸めてみな。」と贅言もの。

「スタルクは辛いだらうぢやないか、」

「否アレキセーフは何うするだらうね、」

「分明らないね。」と云ふもの。

「四十四聯隊は何時出征するだらうね、」

「動員と云ふと何だね、動は動く、員は人だから、人を動かすと解釋して、自家に

安心して居る人を動かし騒がすの意味だらうね、」

「動員したのは十一師團ばかりでせうか、」

「四十四聯隊は幾何位召集したのでせうね、」

「千人位でせう。」

「否、三千人です、何故と云へばお前様、四十四聯隊が戦争に行くとするれば、千人位では跡の用心が悪いでせう。其所へ以つて来て、敵が浦戸港へでも不意に押寄せておらんさい。其れこそ大變です。其れだから三千人ばかりを召集して、豫備の四十四聯隊を拵へて置くのでせうよ。」

と鼻齧かすものもある。

「最早九時だ。」

「早くしないと遅れるかも分明らないね、」

「やいのくが、長いぢやないか、」

「奥様もない癖に、」

と云ふ言葉の尻を捕へて、

「馬鹿、生意氣な事を云やがると、口が縦に切れッ了うせ。遠藤様はな、奥様や媽に背後髪を引かれる様な、那麽女々しい人ぢやアないせ。女々しい人ぢやアないが、人一倍に孝行な人だから、お袋の事が氣になつて、敷居を跨ぐ折がないだらうよ。孝行な人は違つたものだ。汝の様な、お袋の臍線をチヨロマカシて、娘ツ子の尻を追かける様な奴とア比較ものにはならないせ。アバヨ、」と啖呵を切る者。

「何だと、ぐづ銀奴、自分の事は棚に上げやアがつて、お袋の臍線を何うしたと云ふひだ。乃公がお袋の臍線をチヨロマカすれやア、こう、お前は、お袋の骨を食らアな乃公が娘ツ子の尻を追かけるが比較ものにならなければやア、お前が朝から晩迄飲み續けの。往來へ轉倒り。巡査様に引張れの。お目玉を頂戴の。お袋泣かせの藝當は何になるのだ。フン、」と敵手を屈伏せるものもある。

かゝる時、玄關の障子を颯と開いて、内から、二人三人、四人、五人と溢れ出て庭

に降り、其れより順々に戸の外に流れ出したが、最先からは七人目になつて、衝々と格子戸の所に顯れたのは、劍唐花の五箇紋打つた羽織に仙臺平の袴を履いた。今日入營の主人公、遠藤辰雄である。

かくと見るや、群衆は一齊に、

「遠藤君萬歳ッ、」

「萬歳ッ、」

「萬歳ッ、」と界限を動搖まして、此の運命の數寄な青年の前途を祝したのであつた。

(四十六)

四月十二日、其の日も既に午前十一時になつたので、朝倉兵營の門前近く詰寄せた。兵事會、婦人會、青年會杯の會名を記した紅白の旗を翻して、時刻の來るのを待つて居た。見送の各團隊は、忽ち鼎の沸くが如き雑踏と、喧囂とを極めて、宛然と芋を洗ふが様に薙めさだした中に、轟々と身を擡いで、營門に向つて急ぐのは、今日應召せられた豫備後備の壯丁である。

其の時であつた。營門を正面に仰ぐ群衆の中で、力の籠つた明瞭した聲で、

『其れぢやア最う行くのかね、』と云つたものは三島寛藏である。

這れに應じて、

『あゝ、最う行かなくちやならない。其れぢやア君、母を頼むだよ。』と帽子片手に素切と立つたのは、見送人の其々に挨拶を濟ませて、最後に母のお秋に訣別して、

營と營門の光景を見た後の辰雄であつた。辰雄の右には母のお秋。左には寛藏の母のお瀧が引添ふて居るのである。

『安心したまへ。お母様は、明日から早速僕の自家へ引取る都合にするからね、』

と寛藏は衝と寄つて、母のお瀧を押隔て辰雄と並び、

『君合状は可いだらうね、』と注意する。

辰雄は帽子を片手に持替て、其の手を懷中に入れて、

『あゝ、持つて居る。』

と取出して、屹度見たが、臆て慌はしく、寛藏の胸先越にお瀧を見て、

『三島の小母様。這れでお別れいたします何うか母の事を可しくお願いいたします。』

『あゝ、お母様の事は、妻と寛藏とが不及ながら、御不自由のない様にお世話いたします積でございますから、お母様の事は何うか心配せず、自分の身體を厭つてね、其れから休暇がありましたら、一寸く歸つてお出でなさいね。』とお瀧は名

残を惜むで居る。

何所迄も嬉しき人の情に、辰雄は今更の如く胸迫つて、

「諾。難有うございます。其れぢやア何うか、母を頼みます。其れから繁代様にも、母の事を可しく頼むで置いてください。」

「あい、其れぢやア御機嫌可しうに、お母様の事は、決して心配なさらないが可いですよ。」

と云ふお瀧の言葉の切れるのを待つて、辰雄は今度はお秋に向ひ、

「お母様、其れぢやア最う入營いたします何うかお身躰を厭つて、病氣に罹らない様にしてくださいませ。」

「其れぢやア最う行くのかね、妾は三島様の所に居れば、親や兄弟の所に居るも同じだからね、妾の事には心配しないで、何うか自分の身躰を大切に、無謀な事はなるだけしない様にね、眞箇に妾の事には心配は入らないよ。其れで妾も一寸く

面會に行くからね、お前も暇があつたのなら歸つてお出で。」

「諾。諾。其れぢやアお母様。」と辰雄はお秋に離れて、顧み勝に二歩、三歩ばかり。寛藏は引添ふた。

と、思ふ間に、早、群衆に間を隔られた。辰雄は遂に母と、お瀧と、町内の人々を見失なつて、人波の中に巻込まれたのであるかくて、石橋に片足を掛けた時、

「君、君、遠藤君、」

と云ふものがあるので、心着いた辰雄は、唯、見れば、左手に引添ふて居た寛藏が、自分の袂を引動かして居る。

「何かね、」

と其の面を見ると、寛藏は振返つて、一間許の後の方を指して、

「見給へ彼の醜態を、」

と云ふので、何心なく眼を遣つた辰雄は、咄嗟、兩眼を險しくしたのである。其所

には、此方に流れ来る人波の中に交つて、松崎俊吉と、お千代とが、ひつたり並んで居るのであつた。

「彼人も入營するだらうかね、」

と寛藏の間へば、辰雄は黄蘗を飲む様な聲で、

「左様だらう。一年志願の豫備兵だからねちやア君、最う失敬する。」と云つたからと思へば、早、押合ひ、糞合ふ壯丁に交つて其の姿を消したのであつた。

(四十七)

四月廿四日の日曜の朝、本町坪井家の門前には、お千代とお松の主従がひたと寄添ふて、待物のある形で、上町の方を見て居たが、少時してお千代は其の目を轉じて、十時頃の太陽を筋向なる薬種店の土藏の屋根越に仰いで、眩いと云ふ眉の顰め方をして「何うしたのだらうと。」小聲で唸く様に云ふ。

お松は其の意を得た状で、

「左様でございます。」と相槌。

お千代は繰返して、

「何うしたのだらうねえ。お前、」

と云つたが、又、上町の方に目を遣つて、と、見て、

「彼所へも三人見えだが、何うも俊様ぢやアなくつてよ。」

「左様でございますか、何うも旦那様の様ぢやアございませぬホ、」
と笑ふお松の顔を媚のある眼に烏渡睨むで、

「松、」
「諾々。妾は何も申しません。諾々。」

「何云つてるのだね、眞箇にホ、」

「何も申しません。何で妾が、旦那様でもないのに旦那様なんて申しませう。諾々。」
と手も着けられないので、お千代は諦めて、

「知らないよ、最うホ、」

「ホ、」

と共に笑つたお松は、應て眞面目になつて

「彼の兵士も、最初通つた兵士も、可呀な色の洋服を着て居るぢやアありませんか、
澁色とも、茶色とも名の着かない色ですね」

「名の着かない事があるものかね、彼れはお前、今度の戦争について發明した、カ
ーキ色と云ふ色なのだよ。」

「其れぢやア彼の洋服を着て居る兵士は、最う、直、戦争に行くのでせうか、」
「だつて事よ。」

「其れぢやア松崎様も行らつしやるのでございませうか、」
「あ、」

と上調子で云つたが、又、上町を見て、

「彼處に手紙には書いてあるのだに、何うしたんだらう。早く來らつしやらないと、
散歩する間もあれやアしないわ。ねえお前」

「左様でございますとも、最う追付十時ですよ。」

「眞箇だわ。其れとも外出が出来ないだらうかね、手紙には、明日は初ての外出が許
可されるから、九時には屹度行くと書いてあつただけど、眞箇に何したんだらう。」

と焦れ給ふ。

お松は慰めて、

「那麽事はございますまい。振々の兵士でさへ外出を許可されて居ますのに、曹長ともあらうものが、外出を許可されないと云ふ事はございませぬわ、」

「左様かねえ、」

「左様ですとも、」

と心得顔に云つて、流るゝ様な瞳をして、又、上町の方を見たが忽ち、眼を睜つてお千代に抱着く様に寄添ふて、

「お嬢様、さ、来ました。お嬢様、」と呼吸を窘迫します。

「何だね、松、誰人が、誰人が来たかね、」

「誰人がつてお嬢様、其れ。其れ。彼れですわ。」

「彼れつて誰人、」

と云つて、静にお松の指す方に眼を遣つたお千代は、

「えッ、た、辰、」

とばかり、身を翻して、門内深く逃げ込むとするので、お松も遅れじと續いたのである。少時する間もなく、上町の方から来たカーキ色の軍服姿凛々しき一人の兵士あり。軍隊的の歩調正しく、坪井家の門前を通越さうとして、お松お千代の姿の消えた門内に、冷なる一瞥を遣つたのであつた兵士は上等兵遠藤辰雄である。辰雄は其の儘下町に向つた。

かくて、ものゝ五分時ばかりも立つて、坪井家の門前に再、お松お千代の姿の顯る、出合頭。

「やア、と云つて衝立つた好貌の曹長あり、お千代は一眼見て、

「おや貴郎、」

「まア遠藤様、」と頓驚に云つたのはお松であつた。

(四十八)

坪井の門前を通越さうとして、門内に冷なる一瞥を呉れた辰雄は、其れより三分を出ずして、農人町なる三島家の障子を開けた、暖な二階の一室に寛藏と差向つて居たのである。

寛藏は話の切れ目に、辰雄の軍服姿を昵と見て、

「君、出征は何時かね」と聞く。

「あゝ、未何時とは分明らないが、軍服は這廬に變つたし。劔には刃をつけたし。

最う油断は出来ないだらうよ。」

「左様かね、其れから君、」

と寛藏は何か思案の跡であつたが、

「跡で聞くと、松崎は彼の時確に入營したと云つたが、顔を會する事があるかね、」

「あるさ。大ありだ。」

「其れぢやア同隊かね、」

「同じに七中隊だが、幸にして部下ではないのだ。」

「左様か、言葉を交換した事でもあるかね」辰雄は厭な顔をして、

「左様さ。僕不快だから、私に言葉なんかは交換さないがね、兵卒として餘義なく

される時があるのだ。渠は曹長だからね、」

「左様か、不快だらうね、」

「随分不快だ。渠に對する時は、頭から糞汁でも浴せられる様に思ふのだが、既に國民の本分を盡さうとして居る以上は、幾何辛くつても忍耐する事が出来るのだ。が、君、近き既往の歴史を辿つては、僕實に我を忘れる時もあるよ。」

「左様だらう。察するよ。」

「難有う。僕最う決心して居るのだから、最う馬鹿な真似なんかはしやしない。其

所は安心してくれ給へ、其の替り母を頼むよ』

『可いとも、那麽事には心配せず、金鵒勳章でも貰つて來給へ。』

『左様だ。金鵒勳章が欲しい、金鵒勳章は僕が國家の爲に蘇生した紀念になるからね』

『左様だ。是非金鵒勳章を貰つて、彼の曹長に鼻を明して遣り給へ。』

『左様だ。』

寛藏は思起した事でもあるらしい相で、

『其れから君、遠藤君。』

『何かね、』

『君は其の曹長と、坪井千代なるものとの關係を知つて居るかね、言を替へば、

坪井の一家一門が、君を侮辱した原因だ。』

『知つて居ると云ふでもないが、又知らないと云ふでもない。』と辰雄の言葉は冷然

たるものである。

『左様かね、』

『君は何か聞いた事でもあるかね、』

『あゝ、昨日確なる筋から聞いて見たが、實に失敬だ。君、松崎とお千代とは、君を侮辱した時には、既に結婚の約束をして居たと云ふのだ。其の上松崎とお千代とは、』

『君、』

と皆迄云はさず、辰雄は片手に制して、寛藏の言葉を遮り、

『君、最う何も云つてくれ給ふな。種々な事を聞くと面白くないからね、』

『左様か、其れぢやア云ふまい。が、實に失敬だ。』

と云ふ折柄、階子段に軽き足音がして、纏て、襖を啓けて這入つて來たのは繁代である。繁代は行儀よく座つて、寛藏に向ひ、

『彼の貴郎、お支度が出來ました。』

「左様か、」

と領いて置いて、辰雄を願て、

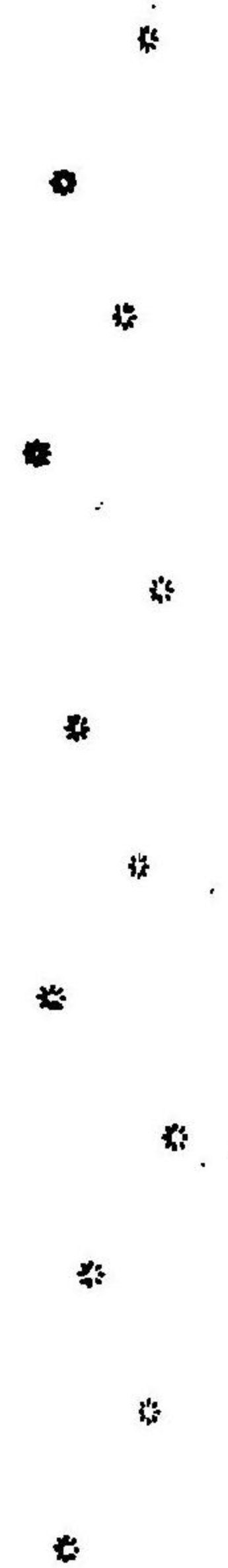
「君、其れぢやア何も御馳走はないが、一杯遣らう。」

「あゝ、其れは何うも濟まないね、」

「否、禮なんか云はれる程の事はないのだ」

「真箇に何も御座いませぬよ。」と云つたのは繁代である。

「否、何ういたしまして、真箇に濟みませぬ。」と辰雄は會釋を返したのであつた。



四十九

其の日も既に午後三時に近い遠藤家の立關口には、寛藏と、お瀧と、繁代と、お秋とが並むで、椽に腰を掛けて、靴を穿いて居る辰雄を胸つて居る。

臆て辰雄は穿き占めて、二つばかり踵で踏むと、此方に向直つて、

「其れぢやア行つて参ります。御機嫌宜しうに、此上とも母をお願ひいたします。」と恭しく會釋して、ぐるりと背向になり、土間を二三歩、敷居を跨がうとする。

「其れからお前、屹度潮江の方へ廻つて行のだよ。」

とお秋が云つたので、辰雄は一寸振返つて、

「諾。」

と領いて置いて、

「其れぢやア御機嫌よろしう。」とばかり衝々を行く。

梅花は根に歸つて、境内は青葉若葉の綾美くしき潮江天満宮の樓門近く来たのは、カーキ色の軍服を着た二人の兵士で、何れも酒氣紛々として折柄の斜陽を浴びた顔は赤く、鼻息は荒く、何やら高聲に話して居る。此の時樓門の内からもカーキ色の軍服を着た一人の圓顔の兵士が出て来たが、此方に向つて来る二人を見ると、其の儘盪乎と停つて、片手を挙げ、正しく敬禮をした。

つて、

「汝、那麼敬禮があるかッ。」と一喝した。斯くと聞いて、圓顔の兵士は、從順に、

「諾。」

答へて、再、恭しく敬禮をすると、今度は其の左に居た吡の切上つたのが、

「汝、此所へ何しに來た。云つて見ろッ。」と濁つた聲で云ふ。

從順は兵士たるもの、勤である。圓顔は何處迄も從順に、

「諾、私ですか。」

「外に誰人も人間に似た奴は居ないから、分明つてらアね、私ですかが贅言だ。」と斬込むだのは獅子鼻である。

圓顔は争はず、

「私は天満宮に參詣に來たのです。」

「戦争に行くのが恐しいから、何うか鐵砲玉が的中しません様につて拜むだらうな。」と吡の切上つたのが嘲ると、獅子鼻も相槌を打つて、

「左様だらう。左様に違ひない。確に左様だと顔に書いてあるのだ。汝は其れでも

土州男子か、腰拔奴ッ。」

「我々軍人の面汚しだ。」

「寧ろ江山へでも登つて首でも縊れッ。」

と獅子鼻の言葉の切れると共に、咄嗟、圓顔の耳朵には颯と紅の色が上つたが、

思ひ返した様で、言葉も静に、

「私でも日本國民です。決して那麽卑劣な事を神に祈る様な事はしないのです。」と云ひながら、草々に二人の側を通越さうとすると、獅子鼻が忽ち身を躍らして、「な、生意氣な事を吐しやアがれッ。」と云ふや否。横さまに武者振付く。

「ど、何うするのです。何うするのです。」

と圓顔の驚いて振拂はふとする所を、眈の切上つたのが、早速両足に捕まり

「何うも糞もあるカッ。」

と扱つたので、圓顔は堂乎とばかり、地響打つて打倒れたので、二人は起しもせず、に執つて押へ、同じく拳を固めて、

「うぬ。うぬ。」

「畜生ッ。」

「生意氣な事を喚しやアがれッ。」

「日本國民が何うした。」

「最一度云つて見やアがれッ。」

と續け様に打下す耳近く、

「何うした。何の事だ。待ち給へ。」と云つたものがある。

(五十)

何うした。何の事だ。待ち給へ。と云はれて、獅子鼻と、毗の切上つたのは、拳を振上げたなりに振返つて、聲の主を尋ねると一間の眼界に這入つて来た兵士あり。兵士は豫備の上等兵遠藤辰雄である。辰雄は靴音活潑に蕨乎と立働つて、

「何うした。何事かね、」と云つて、二人の顔を睨と見た。

唯見て、獅子鼻は、忽ち口を尖らして、

「何うしたつて可いなやないか、汝の知つた事ぢやアねえ、」

「何故邪魔しやがるのだ。」と毗の切上つたのが此方に向ふ擬勢をする。

辰雄は一寸も騒がず、

「僕は何も邪魔しやしない。只、君達が何かして居る容子だから、甚麽事かと思つてね、鳥渡其れを聞いて見たばかりさ。外に何も理由はないのだ。」

と微笑すると、獅子鼻が早立上つて、

「な、何だと、生意氣な事をぬかしやがれッ。」

と詰寄せるに續いて、毗の切上つたのも、

「邪魔しない事があるか、其れが邪魔だ。生意氣野郎ッ。」

と立向つたので、漸く虎口を逃れた圓顔の兵士は起上つて、塵を拂ひ、落散つた帽子を拾つた。唯、思ふ間もなく、辰雄は左右に敵を受けたが、

「君達は酔つて居るね、」と益沈着な言葉遣である。

「や、何うも御馳走様。何時も何時も御馳走になつて済みやせん。畜生奴ッ。」

と毗の切上つたのが、打突れば、獅子鼻が拳を固めて、

「酔つて居やうが、居まいが、汝の御世話には及ばねえ、コン畜生ッ。」

と雙方一度に懸かるのを、身を替して避けた辰雄は、力の籠つた聲で、

「何をするッ。」と一喝した。

兩眼には血を濺いで居るが、唇は嚙締て居るが、靜に衝立つて、たら〜と斜陽の流れた壯嚴な樓門の彫刻を仰いで居た圓顔の兵士は、此の時手に汗を握つた様であつた。

辰雄に身を替はされて、二人は身體の平均を失し、思々による〜となつたが、取つて反して、

「何も糞もあるカツ。」

と獅鼻か前から撫手と組むと、毗の切上つたのは、

「放すな、畜生ッ。」と背後から組付いた。曳聲高く。力足。

辰雄は前後に敵を受けて、

「な何をするのだ。何をッ。」

とばかり。滿身の勇を鼓して振放さうとするのを、睨と見て心を決したらしい圓顔の兵士は、

「實に亂暴だ。詮方がない私が敵手になる其の人には罪がない。さア私に来るさ。これでも健依別の血を受けた土州男子だ。」と云つて大手を擴げて、衝々と来る。辰雄は聲をかけて、

「君、君に正義はあつても、上官に敵對したら事が面倒だ。僕には心配は入らないから、早く歸り給へ。何に、これしきの事に君の手なんか借らなくつても可いさ。む。こら、」と角力て居る。

圓顔は氣の毒氣に、

「其れでも何です。何うも私の爲に、貴君に迷惑をかけたは、」

と未肩を怒らして居るので、辰雄は氣を苛ちて、

「可いさ。可いと云へば可いさ。早く歸り給へ。」と云つて、二足三足。

「其れでも、」

と云つて圓顔は未猶豫つて居たが突如として思ひ浮ぶる事あり。急に身を翻して

彼方に向つて飛が如くに去つた。
纏て其の姿の消えた時。辰雄は血聲を振絞つて、
『ゑいッ。』とばかり氣合を籠ると、瞬間、三人の身軀が離々になつたが、獅子鼻と
毗の切上つたのは、身軀の平均を失して居た。颯と夕風。

(五十一)

辰雄の難儀を跡に見て、飛ぶが如くに走つた圓顔の兵士は、一瞬の内に鳥居の許に
來たが、唯、見れば、左手に近き堤の上。今しも假橋を渡つて來たらしい好貌の曹
長と美くしい女とが雁行して、靜に此方に向つて降りて居るので、一目見た圓顔は
折悪しと思つたらしい色をして

『了つた。』

と口の端で唸いたが、纏て領く事あり、

『チョツ、許方がない。』

と早速驅付けて、敬禮する間も遅しと、帽子を抜いで姿勢を正し、

『曹長殿』と呼吸を窘迫ます。

『何うした。』

と凛とした聲で云つて立停つたものを誰人ごかなす。これ文學士松崎俊吉が應召後の姿である。雁行した美人は、坪井の女お千代であることは云ふ迄もない。

圓顔は恭しく、

「諾。最初私が天満宮に參詣をしまして、其所の櫻門の傍迄歸つて來ますと、杉山上等兵殿と、堀江上等兵殿とがお出になりまして、汝は何しに來たかと申しますから、私は天満宮へ參詣に來たと申しますと、鐵砲玉の發中らない様につて拜ひたらう、腰援奴、汝は軍人の面汚だと申しますから、不肖私でも日本國民です。決して那麽卑劣な事を云つて神頼はいたしませんと申しましたら、汝は生意氣だと云つて、私を突倒して置いて、散々ばら亂暴をして居ます所へ、丁度、名は誰人ですか、上等兵殿が參りまして、杉山上等兵殿と、堀江上等兵殿とをなだめやうとしましたのが原因となりまして、杉山上等兵殿と、堀江上等兵殿とは私を捨て置いて、今度は其の上等兵殿に喧嘩を吹懸て居る所でございませう。何うか都合好く脩めて貰う事は

出來ないでございませうか、』

俊吉は豪然として、

「うむ、左様か、可らしい、が、雖然何だ。乃公が出る事か面倒だから、汝、乃公が其所へ來たと云つて、喧嘩を停めるが可いだらう、其れで聞かなければ、乃公が行つて遣る。』

「諾。』

「左様して見る。』

「諾。其れぢやア左様いたしませうか。』

「其れが可い。乃公も跡から行つて遣る。』

「諾。其れぢやア、』

と會釋して、圓顔は又取つて反した。取つて反して喧嘩の場所に来て見れば、今しも毗の切上つたのは横倒になつた身軀を起さうとし、獅子鼻は辰雄の背後に組んだ

頭を左の小脇に引付けられて、帽子も飛んで居る。

圓顔は其れと見るより大聲で、

「諸君、松崎曹長殿が来られました。其所の鳥居の傍へ迄来られて居ます。」と叫ぶ様に云ふ。

此の聲が聞えたのか、此の時起上つた此の切上つたのは、吃驚して、四方を胸しながら、

「何、松崎曹長だ。」

「左様です。松崎曹長殿が来りました。」

應じた圓顔の言葉に續いて、

「ほ、眞箇か、」と云つたのは獅子鼻である、圓顔は然もこそと、

「眞箇です。眞箇です。それ、最う見えます。松崎曹長です。」

「左様か、眞箇か、眞箇か、眞箇か、」と口早に云つて、皆の切上つたのは、其所等

あたりをキョロ／＼として居る。

獅子鼻は辰雄に組むだ兩手を放して、

「は、放せ。曹長だ。曹長だ。眞箇だ。」

と身を採擡ので、

「馬鹿なッ。」

と云つて、辰雄は小脇に引付けた頭を緩めて遣ると、すつぱり抜けて、落散つた帽子を掻拾つて、跡をも見ずに樓門を這入つて逃げて行くので皆の切上つたのも、

「こ、斯うしちやア居られん。」と獅子鼻を追つて行く。

其の跡を見送つて、靜に塵を拂つた辰雄は「馬鹿なッ。」と云つて、厭な厭な顔をしたが、遂に其所を動かなかつた。

敵手の二人は、樓門を這入つて逃げて行つたが、恩人の上等兵が動かないので、圓顔は氣を揉みながら、

『上等兵殿、私の爲に劇甚御迷惑を掛けまして、寔に申譯がございません。貴君には何も背後暗い事はありませんが、松崎曹長殿が來られて居ますから、此の場をお替しになつたら何うです。』と背後を願ながら云ふ。

辰雄は冷然として、

『替しても可いが、那麽事をするのは、何だか潔くないからね、寧ろ此の儘に居て今の顛末を報告して置く方が可いだらう。』

『左様ですか、』

『僕には心配は入らないから、君は歸つてくれたまへ。』

『諸。』

『眞箇に心配は入らないよ。』

『諸。諸。』と圓顔は未もぢくして居る。

辰雄は明瞭した言葉で、

『君、眞箇に心配は入らないよ。』と云つて松崎曹長の來るさの方を見たが、忽ち、眉を動かして、眼を瞬つて、我を忘れた状をした。と、思ふと、口を閉ぢて俯向いた。圓顔も同じく彼方を見て、なる程と先襟を正したが、さるにても、斷乎として自分の言葉を退けて、此の顛末を報告すると云つた人の舉動としては、不思議此の上なしと秘に辰雄の顔色を讀まむとする趣があつた。

間もなく、靴の音。駒下駄の音。其の二箇の音が揚合つて、一種の響を造りながら、靜に五歩の眼前に來たのは、件の松崎俊吉とお千代とである。

其れと見ると、辰雄は突然顔を擧げて、衝々と進み出で、恭しく一揖して後、帽子

を片手に取つて、氷の如き音葉で、

「曹長殿」と云つたが、敢て仰き見ない。俊吉は眼を睜つた。お千代は身顛して、

突如俊吉の背後に隠れたのである。辰雄は俊吉の早速の言葉がないので、

「松崎曹長殿」と再

みるく俊吉の顔には嘲の色が動いて、

「何か、」

「曹長殿、僕は今是で、二人の上等兵を敵手にして喧嘩をいたしました。國家非常

の際に於いて、苟も帝國軍人たるものが、這麼亡狀な事をいたしましたのは、寔に

申譯のない次第ですが、實は彼所に居る所の二等卒が、罪なくして二人のものに酷

待せられて居る様子があつたもんですから、其の間に立入つて、事の始末を訊かう

と致しますと、亂暴にも僕に向つて、喧嘩を吹懸るもんですから、詮方なく僕は敵

手になつて居ました。僕はこの事をお耳に入れて置きたいと思つたものですから、

二人のものは、曹長殿の來られると云ふ事を聞くを逃げましたが、僕は曹長殿の來られるのをお待ち申して居ました。」

「うむ、其れで二人の上等兵が、其のものを酷待したと云ふ事は、何うして分つたのか、」

「諾。其れは僕が、天満宮に参詣いたしたいと思ひまして、其所まで來て見ますと、

其れなる二等卒を捕へて、何か云つて居る様子でしたから、立つて見て居ます内に、

二人が飛蒐つて打倒しましたからです。」

「其れは不可。若、其の二等卒が二人のもの、乃上官に向つて、不都合な事を

して居たら何うする。單に打倒す所を見て酷待と云ふなどは、實に早計も甚し

いもんだ。君は軍律を何う心得て居るんだ。」

「諾。」と云つた辰雄の聲は震へたのである

「今日は可。以後は屹度注意するが可い。」

「詰。」

「其れぢやア早く歸營するが可い。」

「詰。」

とばかり俯向いたなりに一禮した辰雄は、其の儘歩を轉して、跡をも見ずに樓門を這入つて、本營の方へ行く。先の程より氣の毒氣な顔をして立つて居た圓顔も一禮して、これは、反對の方へ歸つて行く。俊吉の背後にあつて、ほッ、と吐息したものである。

(五十三)

樓門を這入つて行く辰雄の背後姿を見送つて、俊吉は自分の蔭を被に立つて、微に吐息したお千代を願て、

「千代様何うした。ハ、ハ、ハ」と笑つた。

お千代は怖る怖る辰雄の去つた方を一瞥して、稍安堵したらしい顔で、

「眞箇に妾、死ぬ程辛くつてよ。」

「蛇と何うだね。」

「蛇よりも執念くつてよ。妾が何うかすると、屹度ですもの。眞箇に厭だわ。今朝だつて左様よ、貴所の被入のが遅いものだから、松と二人で門口へ出て居ますと、のこゝ来るし、今だつて、此所へ參詣をして置いて、其れから貴郎を朝倉へ迄お送りせうとすれば、又居るのぢやアありませんか。眞箇に何と云ふ因果でせうね。」

と焦つたいと云ふ顔をする。

「又頭髪へ酒を飲まさなければやア不可ないねハハハ、」

「ホハハハ、眞箇に左様ですわ。」

とお千代は秘に四方を胸して置いて、微と俊吉の右手を握つて戯弄ながら、

「何時も妾達の自由を妨げるものだもの。」

「其れぢやア、悪魔かね、我々の自由を妨げる悪魔だらう。」

「左様悪魔ですわ。」

「雖然何だ。遠藤の身になつて見ると實に可愛想だね、自分の許嫁の妻で、其れで

戀人たる女には、蛇より執念の、悪魔だのと厭がられるからねハハハ、」

「厭よ。厭ですわ。那麽事を云ふだもの。妾厭よ。」と執拗給ふ。

「ハハハハ、其れぢやア可愛想とは思はないね。」

「誰人が彼麼悪魔を可愛想に思ふもんですか、貴郎は悪魔と思はなくつて、」と蜜の

様な甘い未來のあるものを樂しむで居る如き可愛らしい兩眼に敵手の顔を睨と見上げる。

俊吉は見下して、言葉も眞面目に、

「思ふことも、僕だつて彼奴の顔を見ると、其の一日一日は、何うも不快で溜らない。」

「妾も左様ですわ。那麽事を思ひ出すと、御飯もお甘しくなくつてよ。眞箇に厭な

悪魔だわ。」

「悪魔にも好きな悪魔と云ふのがあるかね、」

「其れやアありませんけどもホハハハ、」

「ハハハ、」と俊吉は笑つて居る。

「眞箇に貴郎は意地が悪くつてよ。」

「矢張悪魔かねハハハ、」

「ホハハハ、悪魔ですわ。」

と云つたが、お千代は何か思ひ出した様に

「悪魔つて云へば、貴郎は悪魔と御一所だつてね、」

「左様さね、中隊は同じだが、部下にはして居ないよ。」

「言葉を替す事がありますの。」

「あるさ、職務上詮方なく替す事があるのだが、實に不快で溜らない。が、雖然、

最う何むだ遅くなると不可ないから、早く參詣をして歸るとせうかね、」

「左様ですな、そして悪魔は未本堂の方に居るのでせうか、」

「彼所から道路の方へ出られる所があるのだからね、」其の方から歸つたらうよ。」

「左様でせうか、」

「左様だとも、」

「其れぢや お浄水を使つて、參詣をいたしませう。」

「左様だね、」

と云つて、俊吉は右手をお千代に預けなりに、二人並んで、樓門からは左側になつた御手洗石に近づいて、冷い清水に浄水を使つたが、臆て終つて、翻つて立つた時、鵬であらう。消魂しい鳥の聲。跡が妙に寂然となつて神寂た。

「何でせうね、」

とお千代の間に應じて、俊吉は優しく、

「あれかね、鵬だらう。」

と云つて一足踏み出す折柄。樓門を出る軍服姿は、紛ふ方なき遠藤辰雄。お千代は見るより、突如俊吉の背後に匿れて、

「悪魔ッ。」と小聲で云ふ。

辰雄は二人を知らざる様で、外服も振らず雲に乗つた形で、步調正しく歸つて行く。

(五十四)

五月三日、朝風清き高知公園の大手先なる廣場には、今日征露の途に登るべき土州健兒の一隊二千餘人、暫時の休憩を許可されたので少時の間たりとも、影の形に添ふが如くにして自分を送つて來た兩親を初め、可愛の妻子を慰めやうとするもの。兄弟に後事を托するもの。さては、知己朋友と名残を惜むものなどが、其れは鼎の

沸くが如き喧囂を來たしたのであつた。其の喧囂を青葉若葉の、幔幕に隔てた藤並神社の境内なる唯ある樹蔭に、三巴となつて話して居るのは、戎衣の袖爽な遠藤辰雄と母親のお秋と、辰雄が唯一の知己で其れで恩人たる三島寛藏の三人である。

辰雄は其の時顔を反けて、
「其れぢやアお母様、私は最う参りますから何うか御機嫌よろしう、私のことは餘

り御心配なさらしないで、お母様こそ身躰をお厭ひなすつて、何うか病氣に罹らない様にしてくださいませ。お母様の事は私から、呉々も三島君に頼むでありますからね。」と森然と云ふ尾に續いて、寛藏はお秋に向ひ

「小母様、今も云つた様に、辰雄君の居ない間は私を辰雄君と思つて居て下さい。私は辰雄君の様な孝行は出來ないけれども母と繁代と三人で何時迄も小母様に厭な思はさせないです。」と眞實は面に顯れて居るお秋はホロリとする涙を呑むで、

「何うかねえ、眞箇に義理も縁もない妾達を這様に迄してくださいませると云ふのは、何と云ふもつたいたない事でせう。眞箇に妾はお禮の申様もございません。」と目を數瞬き、又もや辰雄に向つて、

「辰雄、其れでは妾は、三島様の御言葉にのまえて、何時迄も三島様の御厄介になつて居ますから、妾には心配しないで、何うか身躰を大切にしてくれ、輕卒な事をしない様にしてお呉れよ。」

「諸、其れは最う、自分で自分の身を損ふ様な事は決していたしませんから、何うか其所の所は御安心くださいませ。」
と悠然寛藏を願て、

「三島君、くどい様だが、吳々も母を頼むよ。僕が幸にして首尾よく歸つて来る事が出来たら、此の御恩は屹度反す積りなのだ。」

「君、最う那麽他人行儀な事は廢し給へ。其れよりか君、如何なる事が出来やうと高知市農人町の三島の家、君のお母様ある事を忘れ給ふな。」と寛藏は意味あり氣な事を云ふ。

辰雄は其の心を解した状で打領き、

「あ、甚麼事があつても忘れない。」

と云ふ折柄、耳を劈く整列の喇叭の音がしたので

「や、整列だ。」

と、忽ち一步踏出したが、心着て振返つて、

「其れぢやア三島君、」と云つたが、背後髪引かるゝ思である。寛藏も一步進んで、

「其れぢやア行き給へ。お母様の事は決して心配したまふな。」

「難有う。其れぢやア、」

と會釋する傍へ、衝と進むでびつたり並むだお秋は

「其れぢやアお前、最う行くのかい。」

「諸、最う行かなくちやアなりません。」

「其れぢやア身軀を大切にしていね、暇があつたのなら、一寸々々手紙を出ておくれ。」

「あ、其れぢやアお母様も。」

と歩む。お秋も、寛藏も雁行して一行は境内を出やうとする前に當つて、

「そ、其れぢやア、最う行らつしやらなくちやア不可ませんの、え、え、貴郎。」

と断々ながら、戀々たる美しい女の涙聲がするので、辰雄が、第一に、お秋も見た。寛藏も見えて眼を睜つた。故ある哉。二間の前を行く一行三人の男女があつて、跡なるはお勝。其の前に抱合ふ様にして並むたのは、其れは俊吉とお千代であつた。

(五十五)

背後には、辰雄。お秋、寛藏の三人が眼を睜つて居るけれども、前の三人は何の氣も着かないので、

「其れやア俊吉だつて、何も進んで行きたくはないが、お國の爲だからね。それを
お前が那麽にすると、心残がして、綺麗に行く事が出来ないからね。」と慰めたの
はお勝である。するとお千代は涙聲で、

「だつて妾、厭だもの。」

「又那麽分らない事を云ふ。那麽事を云つちやア不可ないぢやないかね」
と云ふお勝の言葉に續いて、俊吉はお千代の背を撫で擦りながら、

「千代様、貴女が那麽に云つてくれると、僕は何だか氣が變になるからね、何うか
機嫌可く笑つてくれないかね。」

「だつても。」とお千代は俊吉に身を投掛ける状にして涙吃逆をして居る。
「千代様、後生だから、笑つておくれ。其れでないと、僕は潔く行けなから、

ねえ叔母様。」
と振返つた俊吉は、瞥と此方を見て、忽ち口を噤むで、何か小聲で囁くと、お千代もお勝も振返つて置いて、急足になつたが、早橋を渡つて行く。劍の觸る音。駈行く靴音。人聲物音。呼ぶ聲。叫ぶ聲。馬の嘶砂塵高く上つて空も爲に暗くなる状に思ひ取られた、跡に三人は衝と立停つて、

「君、見たか、」
「お母様御覽になりましたか、」

「あいよ、」

とばかり。寛藏から辰雄、辰雄からお秋に傳へられた言葉の内には、自から或者の影の閃めくのが認められるのである。寛藏は遠ざかり行く三人の姿を睨む状にして

眉を上げ、

「君、見たのかね、遠藤家に崇る悪魔だよ。」と慷慨自ら禁せざるものあり。

辰雄は拳を緊乎と握つて、
「見た、見たさ、悪魔と氣着いて後には、召集せられた當日と、日曜日、天満宮と、今日で三度だ。」と聲を震はしたが、所在なさうに足を運ぶ。
寛藏も遅れず。

「何處迄執着つて、君を窘めるのだらう、獸奴ッ、」
「雖然君、最う安心してくれたまへ、悪魔も今日以來は那麼に崇る暇がなくなるからね、」

「其れも左様だ。」
「其れぢやア最う失敬する。」
「行くのか、最う、」

「遅れちやア男子の耻辱だ。」

と今度はお秋を願て、

「其れちやアお母様、私は最う参ります。何うか身体を厭ひなすつて、病氣に罹らない様にしてくださいませ。」

「あ、妾には何も心配しないが可い。お前こそ身体を大切にしてくれ、甚麼事があるらうとも決して輕卒な事をしないでね、何うか早く歸つておくれ。妾はお前の歸るまで那麼事があつても待つて居るからね。」

「諾。」

と云ふ間に早橋の上に来た。寛藏は言葉も屹張と、

「遠藤君、今お母様の云つた通り、甚麼事があつても、自分で自分の身を疎末にしては不可ないよ。可いかね、」

「あ、可いと。」

と云つた辰雄は、盪乎と歩を停めて、帽を取りながら、

「其れちやアお母様、三島君、随分御機嫌よろしうに、」と會釋するかと思へば眉のあたりにも動く勇氣。征衣の袖も颯爽に、くるりと背向になつて、彼方に向つて駆けて行く。

「其れちやア御機嫌よく。」

と寛藏が先方に立てば、お秋も遅れじと氣も漫に、

「何うか身を大切にねえ。」と續いたが忽ちどつと高まつた人波に漂はされて、辰雄の姿を見失つた。進軍の喇叭。

途端に公園で煙火一發。輝く五月の空高く震はして、續いて一發。又一發。一齊の靴音。聯隊旗は颯と翻つて、健依別の血を受けた二千有餘の土州健兒は、ウラルの雪を心に念じて勇ましく征途に登らんとすれば、中軍に打たせた、銀鬚束に餘る老將軍の愛馬は、太く逞しき躰に武者振意して、高く天を仰いで嘶いたのである。

かくして遠藤辰雄も、松崎俊吉も出征した。

(五十六)

金州南山陥落後の露軍は、北に安子嶺の險を背ひ、南に大白山の絶壁を叩へた一帯の高地に鉢巻形をした半永久的の工事を施して、我軍を瞰制して居るから、猛鷲猛虎の隙あらば一撃と、風を發して睨み合つて居るのに外ならぬ。

今し、敵壘を墨繪の如く見せた十一日の月は、所々流るも霧の様な雲の絶間から、インキ色の光を放つて、刻々に晝の炎氣を消しながら、銃を枕に露營して居る我が將士の夢を照して居る。

將士の夢。夢。敵壘に飛べるか、將、家郷の空に飛べるか、夜は静に更けて、肉吼へ骨嘯く半島の夜とは思はれない程の平穩さてゐる。其の中で、

『遠藤君、起きて居る様だが睡られないのか、僕も暑くつて睡られない、何うだ鉢巻の見物でもしやうぢやないか、』

と云ふ聲が、其所なる天幕の下から起ると

「其れも可いだらう。遣るとせうかね。」

と應じたが、聽て二人の兵士は天幕の前に顯はれた。月の光に透すと、右に居るのは圓顔の頬髯の延びた男で、左に居るのは、暴露の務に色は黒く焦ては居るが、疑ふ方なき上等兵遠藤辰雄であつた。頬髯は眼をあげて、遠に鉢巻形の敵壘を望みながら、見給へ彼の構を、何う見ても毫六親爺が鉢巻をして居るとより外には受取れないからね、彼處に迄せなくちやア、敵が防げないのか不知、一躰露國てえ奴は、體ばかり圖體に大きいが、獨活の太木と差異はないのだ。」

「到底日東男兒の好敵にあらずかね。何しろ、思つたよりは齒應がないと云ふ話だ。」早く彼の鉢巻でも取つてみたいもんだが、

「左様だ。早く遣りたいものだが、未か不知、僕は待遠しくつて詮方がないのだが、何時だらうね。遣付けるのは。聯隊が當地へ上陸したのが五月二十九日だから、今

日七月廿五日から繰つてみると、五十日の餘にもなるが、一昨日の晩前線へ逆襲があつた事を聞いたばかりで、未一度も戦争には出會はないからね、眞箇に僕は焦れたくつて詮方がないのだ。」

「僕だつて左様だ。が、最少し辛棒して居たまへ、厭と云つても鉢巻奪取にはお供をさせられるからね。」

「何時だらう。」

「最う、遅々命令があるだらうよ。」

「早く下れば可いがなア、僕は待遠しくつて詮方がない。其れが不可なけれや逆襲でも可いむだ。今晚は詮方がないが、明日の晩は例に依つて前線に行くから、運好く逆襲でも来てくれると可いが、那處に思つて居ると來ないものだしハ、ハ、ハ、」

「雖然、逆襲ちやア詮方がない。唯、譯の分明らないロスキー先生のウラ〜と、大鼓の音を聞かされるばかりなんぢやないか。」

「其れでも、天幕の中で、南京虫に喰はれたり、油汗を流したりして苦しむには勝してあるからね。」

「其れぢやア何だね、君の戦争したい心は天皇陛下の爲でなくつて、南京虫と、油汗の厭さから起つた事だね、ハ、ハ、ハ、」

「ハ、ハ、ハ、」

と二人は高らかに笑つたが、鱧で辰雄が、

「何時まで立つて居ても溜らない。何處へ腰を懸けやうぢやないか。」

「左様だ。」

と云つた鱧は、右手に近い饅頭の形をして小高い土地を指して、

「彼處が可いぢやないか。」

「左様だ。」

と辰雄の領く折柄、背後の黄梁畑に風渡つて、餘波が音なく頼れて来て心地よい。

(五十七)

かくて、辰雄と、鱧との二人は、饅頭形の小高い土地の上に来たが、折敷く夏草は素よりないので、其の儘土の上に腰を下して兩足を投出して、二人は今更の様に敵壘を仰ぐと、頬髭か口を切つて、

「露助奴、厭に今晚は從順ぢやないか、宵から未一發も打たないだらう。が、宵と云へば最う何時か不知。」

「左様さね。」

と辰雄は西に傾いた月の、今しも露の様な雲に鎖されたのを唳と眺めて、

「最う一時だらうか、其れとも、少し過ぎるだらうか、彼の月では未だ二時にはならないよ。」

「左様だらうね、何しろ那麽晩は逆襲を遣るに以つて來いだ。空は曇つて居るし、

月も最少しすると透入るし、月の入りから運動を起して遣つて来るなら、甚麼陣地だつて一破だが、這麼可い晩を置いて一昨日の晩なんか来ると云ふは、露助も詮方のない間拔だ。」

「君、那麼事を云つて居るが、迂回して此所へでも不意に顯はれて見給へ、其れこそ細君から送つて来た今日の手紙の返事も書けないで済むよ。」

「済つて今日の手紙かね、君と一所に貰つた。あれやア妹だ。僕には君、都合がわつて、三十面をさげて未だ媽のかの字もないのだ。」

「左様か、僕も無妻だ。僕も某都合があつて、女房がないのだ。其れでも君には兄弟があるから可いが、僕には跡にも先にも一人の母があるばかりで、他には道と云ふ親戚のものもないのだ。」

「其れぢやア先刻の手紙はお母様からかね、」

「否友人からだ。」

「左様かね、」

「あゝ、」

と云つて、辰雄は忙はしく衣兜に手を遣つて、開封した一通の手紙様のものを取出して、朧の空に透して、

「這だ。僕の爲には神の如き友人から送つてくれた手紙だ。僕が日夜の苦痛を慰めるものは道より他には何もないからね、この手紙があつてこそ、僕は軍務に従事して居る事が出来たが、若しこれがなかつた時には、僕は些くとも發狂位はして居る所だつた。」

と云つた辰雄の聲に頼崑は耳を傾けて、

「其れぢやア君にも苦勞があるかね、」

「苦勞と云ふ程でもないが、」

「其れでも、少しでもあるだらう。僕もあるのだ。」

「左様か、君もか、」

と二人の顔を合した時、其の時であつた。

風肅々兮易水寒。

と朗々たる聲で、二人の居る所からは左手に當つた、黄梁畑と黄梁畑との間に通じ

た小徑を辿つて此方に來るものがある。續けて、

壯士一去兮不復還。

と結びだが、纏て臚の黑影一箇。靴音も響いて、相距る數十歩の折柄、件の黑影の

辿つて來た道に當つて、忽ち地を蹴る馬蹄の音。と、思ふもとしや、黑影を追つて

騎兵一騎。涼しき聲で、

「松崎特務曹長殿、第〇〇中隊長殿よりの傳騎でございます。」と云つて驢平と駒を

停めた。

同時に衝と立停つた黑影の轡として、

「其れは御苦勞、して、其の使命は、」

「諾。即刻特務曹長殿に御出頭を煩はし度との事でございます。」

「可しい。」とばかり

聲が歇むと傳騎は一參に最初來た道。

頬鬚は我に反つて、

「君、何だらう。」

「左様さね、」と答へた辰雄の聲は沈むで居た。

五十八

既に其の夜は二時に垂むとして、敵壘の彼方に落懸つた血の色をした月の光を浴びながら、サアベル杖に胸を反して、二列になつて整列した一隊の兵士に向つて居るのは、特務曹長松崎俊吉である。

俊吉は其の時、軽き咳をして、

「其の任務と云ふのは、餘事でない。乃公と一所に彼の敵陣地。」

乃公と一所に彼の敵陣地と云つて、はるかに、月の入るさの敵陣地を仰いで、言葉
を續け、

「鉢巻形の防禦工事をして居るから、左様さ、假に鉢巻山として置かう。其の鉢巻山だ。鉢巻山の敵陣地へ、乃公と一所に偵察に行くので、極めて重大な任務なのだ。其れで着眼せなくちやア不可ないものが二個ある。第一は我が軍の前進を防る危

険物即ち、地雷もあるだらうし。狼狽もあるだらう。鐵條網はなささうだが、塹壕
なんかは無論の事だらう。兎に角、我が軍の前進を妨る危険物。第二には、彼の
鉢巻形の防禦物は如何なる方法であるかと云ふ事を充分緻密な注意を以つて偵察せ
なくちやア不可ない。萬一其れが、不幸にして敵に發見せられる様な事でもあつた
のなら、直に退却して復命せなくちやア不可ないのだ。其所で、這の任務に従ふも
のは、心の緻密な、其れで敵に逢つても狼狽せぬ膽力のあるものでなくちやア不可
ない。今此の重任に當るものを、二人、此の隊から選抜するのだから、右の資格に
缺けないと信じて居るもので、此の重任に當らうとするのは、
と云ひさして、流るゝ如き腫に一隊を見渡して、

「二歩進むでみる。」

瞬間の光景沈々として、一隊、肅として静まし。

時に一人あり。忽ち列を離れて衝と進み出で、聲も勇ましく、

私を遣つて下さい。と云つたのは、其れは上等兵遠藤辰雄であつた。辰雄は私交上悪魔の思も只ならぬ特務曹長松崎俊吉と手を携へて、國家の爲に、喜むで、勇ひで、敵壘の偵察に行く。と云つたのである。と、見て、二人。三人。四人。咄嗟の間に這れに倣ふた勇士十餘人。

俊吉はかくと見て、

「改めて聴く必要はないが、念の爲に聴いて見やう、其れぢやアお前達は、自分で屹度此の大任を遂行し得らるゝと確信して居るのだね、」

と云つた言葉に應じて、

「左様です。確信して居ます。」

「生命あるかぎりは屹度遂行いたします。」

屹度遣付けます。」

と口々に答ふる中に、

「盟つて遂行する事が出来ると信じて居ます。」と辰雄も冷に云つたのである。此の時俊吉は、

「可し。」

とばかり打領さ、

「其れぢやア此の内から二人のものを選抜せう、」

と十餘人の勇士を圖と眺したが、衝と顔を反けながら、冷々然として、

「遠藤上等兵、」

「はッ。」と襟を正した辰雄の聲も冷々然として居た。

俊吉は續いて、

「杉浦上等兵、」

と他の一人を選抜して置いて、

「お前達二人は、愈々乃公と一所に行くのだから、國家の爲、呉々も注意して行く

大空の彼方に其れかどばかり黎明の色は動けど、夜明けなば雨とやならん雲の佇まひ恐しきに、我が物顔の霧深く宇宙を鎖したれば、曉の光景とは思はれざる鉢巻山の敵壘に接近した闇の中で、豆を熬るが如き小銃の音に交つて、小聲ながら、其れは腹の底から響く様な聲で、

『し、了つたッ。』

と叫びで、地響打つて黒影一個。ばつたり倒れると、何處からともなく、又一个の黒影あり。綾なき闇の手探に、倒れた黒影の傍近く擦寄つて、

『何處か負傷しましたか、』

と云へば、倒れたのは、負傷の苦痛を堪へ忍ぶらしい状あつて、

『うむ、右だ。右の太股だ。お前は、』

(五十九)

が可い。月が落つると直出發するから、用意があるなら其れ迄に済して置くが可い。』

『諾。』

『諾。』

と答へて、辰雄と、杉浦と呼ばれた上等兵とは、同じく頭をあげて敵壘の方を望めば落懸つた月の光は深くなつた雲に掠れて、宇宙は灰色の霧立籠め、夜色は暗澹たるものであつた。

「私、私、遠藤上等兵です。」

「うむッ、」

と云つて言葉が断へたが、臙で、聲を勵まして、

「を、乃公には構はず、退却して復命するのだ。復命を。」

「諾。」

倒れて居たのは此の時半身を起して、

「退却、退却、早く退却するのだ。早く。」

「諾ッ、」と遠藤と云ふのは、歩を轉じやうとしたが、と、衝立つた。

倒れて居たのは熬立つて、

「退却しろと云ふてあるのに、何故退却しないのだ。上官の命令にぞッ。」

「は、諾。」

と立去りかねた遠藤の黑影は、爪先下の高地を二三歩馳降つて置いて又取つて歸し、

半身を起した件の黑影に擦寄らうとした途端、七發、八發、九發に止まらざら銃聲とばかりあつて、

「あッ、」と叫びで、再倒る、件の黑影。續いて苦痛の苦吟。

「しまった。」

と思はず云つた遠藤の黑影は、犇々と寄つて、

「曹長殿、」と呼ぶ、口邊、兩頬、帽子を掠めて、恐しき彈丸雨、霰。

「何か、」

「復何處か負傷なさいましたか、」

「遣られた、ひ、左の太股を貫通したのだ、」

「左様ですか、其れぢやア私がお供をいたしませう。」

「何、」

「私の肩をお掴みなさいませ。」

「え、」と倒れたのは、再身(よた)を起(た)さうとしたが、今度(こんど)は起(た)し得(た)ず。苦痛(くるつ)の聲(こゑ)で、

「お前は遠藤(えんどう)上等兵(じやうへい)だらう。」

「左様(さやう)です。上等兵(じやうへい)遠藤(えんどう)辰雄(たつお)です。さ、何(なに)うか、私(わたくし)の肩(かた)をお摺(つ)みください。上官(じやうかん)を

保護(ほご)するのは兵士(へいし)たるもの、義務(ぎむ)です。又(また)人の道(みち)です。同胞(どうぼう)の危急(ききう)を救(すく)ふのは。」と

圖切(ずきり)云(い)ふ。

「折角(せつかく)だが謝絶(しゃせつ)せう。其(そ)れよりか早(はや)く退却(たいせつ)して復命(ふくめい)してくれ。」

「諾(だく)、其(そ)れですが、」

「否(いな)、安(あん)心(しん)してくれ。乃(な)公(こう)も、に、日(に)本(ほん)勇(ゆう)士(し)だッ、」

と云(い)つて、苦痛(くるつ)に喰縛(くいしば)る齒(は)ざしりの折柄(せがら)、斷續(だんぞく)せる小銃(せうじゆう)の音(ね)を壓(おさ)して、凄(すま)まじき機

關砲(かんぱう)の音(ね)。交(まじ)つて、人聲(ひとこゑ)、物(もの)の音(ね)。

其(そ)れと見るより遠藤(えんどう)の黑影(こくえい)は決然(けつぜん)たるものあり、

「松崎(まつざき)特務(とくむ)曹長(そうちやう)殿(だん)、上官(じやうかん)の危急(ききう)を見捨(みす)ては兵士(へいし)たるもの義務(ぎむ)が濟(す)みませんから、

何(なに)うかお供(とも)をさしてくださいッ、」

と云(い)ふや、否(いな)。突(つ)然(ぜん)倒(た)れて居(ゐ)るのを抱(いだ)き舉(あ)げ、ヒヨイと肩(かた)に廻(まは)して輕(かろ)々と背負(せお)ひ、

「おッ、」

と矢音(やね)をして疾風(しつぷう)の如(ごと)く、敵壘(てきりゆう)を背後(せお)にして驅下(かひくだ)る頭上(づじやう)を高く轟(とどろ)かして、敵(てき)の野砲(やぱう)

か轟然(こうぜん)一發(いつぱつ)。霧(きり)の幕(まく)は散然(さんぜん)と落(お)ちて、天(てん)は暗(くろ)きも、夜(よ)は明(あ)け放(はな)れぬ。

(六十)

毬か石礮か、鉢巻山の敵壘を背後にして、一瞬一瞬に消えて行く夜の色を一尺の前に追ひながら、赤土のだらく下を、轉が如く馳下つて、竝取つた跡の一望物のなき黄梁畑を横切つて、漸く我が歩哨線に這入つて、唯ある一本柳の樹蔭に倒れる如く座つたのは、月の入から敵壘の偵察を命せられた上將兵遠藤辰雄で、背には左右の洋袴を血汐に染めた一人の負傷者が背負はれて居る。

辰雄は瀧と亂れ打つ額の油を拭ひも敢へず五個、六個、七個。大きな大きな、其れは忙しな呼吸遣をする間もなく、

「松崎曹長殿」と云つて、又、大きな忙しい呼吸を續けざまにする。

少時して、背なる人は、

「あッ、」

と云つたが、突然身を翻して、辰雄の背から退かうとして、自由ならぬ身の横倒

れになつたのは、特務曹長松崎俊吉である。茲に事新しく云ふ迄もないが、俊吉は

文學士で、中学校の校長で、お勝の甥で、お千代の情夫で、お千代の夫で、坪井一

家のものを謀つて、辰雄を辱しめて、其れで辰雄の頭から酒を飲した男である。

俊吉は、驚いて膝立て直した辰雄の姿を、腹這になつた儘の曇つた眼鏡に透して、

「遠藤君、」

「諾。」

「僕はこれ位世話になつたら最う安心だ。君は早く歸つて復命してくれ。」

「諾。」

とばかり、辰雄は姿勢を正しくしたが、心着いて、

「細帯をいたしませう。」

「否、細帯は乃公がする。其れから杉浦上等兵は、」

「諾」私より先になつて居ましたから、無事に退却したらうと思ひます。」
「左様か、其れぢや杉浦も復命したらうが君も早く歸つて復命してくれ。」
辰雄は從順に、

「諾。」

と歩を移さうとして、

「其れぢやア報告を濟せてから、お迎に参ります。」とくると背向になつて行く。
軍服の背より腰にかけて、義務と、人道との光を増す血潮。空は依然として微との
風もない。

遠ざかつて行く辰雄の背後姿を眺めて居た俊吉は、と、負傷の苦痛を忘れて物思ふ
姿であつた。

斯くて辰雄の姿が、唯ある丘の彼方に匿れると、俊吉は我に歸つた。我に歸つて茲
に身軀の苦痛を覺えたのであらう。唇を嚙締て、眉を強く動したが、勇を鼓して、

両手を杖に、漸く半身を起して腰を据ゑ、兩足を昵と見ると、洋袴を染むる紅、滴
る血潮。

「うむ」と云つて、眼を眠つて少時は石の様に固くなつて居たが、と、心着いた状
で、身軀の重量を左手に支へ、右手を眼鏡に近付けて昵と見た。
不思議。

其の右手には一封の手紙を碎けよと掴むで居たのである。

俊吉は眼を瞬つて、不審る有様であつたが何と思つたのか仰向に身を寝かして、臙
て右手を添へ、封筒を引延ばすと、表には、出征第十一師團第四十四聯隊第三大隊
第五中隊上等兵遠藤辰雄様、裏を反せば、高知縣高知市農人町三島寛藏としてあつ
た。察するに、辰雄の衣兜にあつたものが、俊吉を背負つた時か、何かの拍子に、

落ちやうとしたのを、運好く俊吉が掴むたのであらう。俊吉は一心に、其の封筒を
見て居たが少時して、開封した個處に手を入れて、又入れて、二度三度躊躇つたが、

「失敬、」と云つて、漸く手を入れて、中から手紙を引き出して、封筒を胸に置き、三尺許のものを、さらりと繰つて、静に讀むだが、臆て讀み了ると、巻く事も打忘れて、両手と共に胸に置いて、曇つた聲で

「こゝ、戀に破れても、正しき思に生ること日本國民としては片時も忘るべからざる事に御座候。」と獨言して、負傷の苦痛を忘れた状態で、再、手紙を取上げて、透して讀むで、「悪魔だ。悪魔だ。乃公こそ悪魔だ。」と呟く折柄、空の彼方の雲破れて、一道の旭の光 暖に俊吉の半身を照したのである。

(六十一)

俊吉は此の時、再負傷の苦痛に悩むだが、

「濟まなかつた。濟まない。乃公は遠藤君を精神的に殺したのだ。濟まない。」と眼を數瞬く状あつて、

「悪魔だ。悪魔だ。悪魔と云つた乃公が大の悪魔なのだ。」と云つて、唇を噛むで身を顛はしたが、

「乃公は遠藤君の苦痛を慰する爲に、左様だ。」絶交だ。

お千代を思つて居る情を斷つて、遠藤君を慰めねばならない。千代様を思つて居る情を擲つて、遠藤君を慰めねばならない。

「乃公は乃公は怖い戀の夢を見たのだ。馬鹿だ。間拔だ。悪魔だッ、」

と獨言の言葉を續けて、

「乃公は此の夢に熱したばかりで、遠藤と云ふ好個の軍人を精神的に殺したのだ。」

乃公は從來甚麼に遠藤君を苦しめたらう。其れなのに遠藤君は、を、乃公に精神的に殺された其の形骸で、殺した此の乃公を、悪魔の此の乃公を、必死の厄から救つてくれたのぢやアないか、君に忠、上官に従順な、此の好個の軍人を。馬鹿奴ツ、と聲をはづまして、我と我が身を叱責して、

「大悪魔の此の口から、神の如き遠藤君を、悪魔と云つたのだ。」

と云つたが、空鳴り渡る彈丸に、不圖心着いて、手紙を卷いて、封筒に入れながら、裏にある文字を屹と見た

「三島寛藏君は神だ。」

神だと云つて、吐息した時、天窓に近く靴音して、

「松崎曹長殿。」

と呼ぶは確に遠藤辰雄。俊吉の顔には、不安の色動いて、

「あ、」

「お迎に参りました。」

「何うも濟まない。遠藤君か、」

「諾。遠藤です。」

「遠藤君、」

「痛みますか、」

「さ、負傷は痛くないが、せ、精神の苦痛に堪へられぬ。」

「え、何と云はれます。」

「何でもない。從來君を苦しめた精神の反動が押へ切れないと云ふのだ。」

「えッ、」

俊吉は手紙を掴むた片手を空のままにして、

「遠藤君、これは君の手紙だらう。君の衣兜に入つて居たのを、何かの拍子に僕が掴むたものと見える。今、君が行つた跡で心着いたから、悪いとは知つて居たが、不圖君の心がなつかしくなつたものだから、君の近情が知れるだらうと思つて開けて見た實に濟まない。雖然其のお蔭で、僕は君に對して犯した自分の罪を覺醒した。」
「左様ですか、」と答へた辰雄の聲は、其れは冷なものであつた。
俊吉の聲は顫を帯びて、

「遠藤君、僕は君に向つて、更めて謝罪なくちやアならない。」

「私は何も、貴官から謝罪する理由がありません。」と屹張云ふ。

「左様云はれると、僕は一言もないが、」

と云いながら、片手を杖にして起き上らんとして、負傷に惱む身の苦しさを。辰雄は斯くと見て、

「起しませうか、」

「あゝ、濟まないが、手をかけてくれたまへ。」
「諾。」

と云つて、蹲む辰雄は、俊吉の肩に兩手をかけて、靜に抱き起すと、俊吉は左手を背後さまに杖突いて、身軀を斜に倒し、

「何うも濟まない。傳手に此の手紙を。」

と右手を差出すを、

「諾。」と受けた辰雄は柔に衣兜の内。

俊吉は其の了るのを待つて、

「遠藤君、何か其所へ座つてくれたまへ。」

「諾」と其れは從順なものである。

俊吉は其れと見ると、其の前に頭を垂れて堪ふべからざる精神の苦痛に打顫ふ聲を強いて、

「遠藤君、僕は面目ないから、今更一個々君に對して犯した罪の箇條は列擧ないが兎に角、君を侮辱した上に、君を苦しめた僕の罪を容謝してくれたまへし」
「私は、私は、貴官から謝罪される理由がありません。」と云つて唇を噛む辰雄は俊吉の前に正座つた際に小動もさせないが、過去の辛かつた、苦しかつた、無念であつた、情なかつた思が胸に溢れて、惣身の血液の湧き返るのを静めかねた状である。

六十一

俊吉は辰雄の言葉に、二の句が續かなかつたが、臆て心に領く事あり。漸く頭を擡げて、

「其れぢやア遠藤君、」

と云へば、辰雄は我に反つて、

「諾。」

「今の様に云はれては、僕今更言葉がないから、謝罪は時機を見てするとして、遠藤君、厭だらうが今日から、僕の親友になつてくれないかね、」

「え、」

「何うか僕の親友になつて、僕の將來を保護してくれたまへ。僕も力の限君を慰めたいのだ。」

「左様ですか、」

「厭だらうが、何うか聞き入れてくれたまへ。僕が幾重にも頼む。」「幾重にも頼むと云つて、俊吉は恭しく頭を下げたのである。咄嗟辰雄の心は動いた、

「親友と云ひますか、」

「何うか爲つてくれたまへ。」「

「私で構はないですか、」

「爲つてくれるかね、」

「私で構はなけれやアなりませう。」「

「爲つてくれるかね、有難い。」「

と云つて、感謝の色を湛へて右手を差延べ

「其れぢやア契約をしてくれたまへ。」「

「何うか、」

と同じく右手を延べて、静に握合ひながら振動かしたが、と、離々にした其の手を早速衣兜に入れた辰雄は、兼て用意をして居たらしい一箇の繃帯と、洋紙に包むた沃度ホルムらしいものを取出して、

「私が繃帯いたしませう。」「

と一膝刻めば、

「否、繃帯は僕がするから、其れを借してくれたまへ。」「と延べる片手に渡しもせず、

「僕がいたしませう。」「

と辰雄は片膝立て繃帯を持ち替へ、手早く血汐滴る俊吉の右の太股から、薬も塗つた。俊吉は心使して、

「何うも済まならね。」「

「否、何うしまして、」

と云ひながら洋袴の上から縋帯して、今度は左の股に移つたが、其れも了つてたので、

「や、何うも濟まない。これで大丈夫。」と云つた俊吉は、軽く縋帯の上を押へて見ると、痛を覚えて苦しむ。

辰雄は少しく身を開いて、

「其れぢやア肩にかけませうか、」

「難有う。其れでね遠藤君、僕は茲に君と云ふ友人を得たから、不_ふ必_{ひつ}用_{よう}な、否_い、恐_{おそ}るべき、丁度_{ちやうど}薔_{せう}の花_{はな}の如_{ごと}き知_ち人_{じん}に、絶_{ぜつ}交_{かう}状_{じやう}を送_{おく}りたいと思_{おも}ふのだが、無_む論_{ろん}君_{くん}も賛_{さん}成_{せい}してくれるだらうね、」と信_{しん}實_{じつ}は眉_{まゆ}宇_うの間_まにはほめいて居_ゐる。

「絶_{ぜつ}交_{かう}状_{じやう}と云_いひますか、」

「左_さ様_{やう}だ。薔_{せう}の花_{はな}の如_{ごと}き知_ち人_{じん}に絶_{ぜつ}交_{かう}状_{じやう}を送_{おく}りたいのだが、」と云つた俊吉の顔には不_ふ

安_{あん}の色_{いろ}も消_けえて、清_{せい}風_{ふう}徐_{じゆ}に湖_こ上_{じやう}を渡_{わた}るの容_{よう}があつた。

「其_それには及_{およ}ばないでせう。」

と云_いふ辰_{ちん}雄_{ゆう}の言_{ごん}葉_はに、俊_{しゆん}吉_{きち}は頭_{かしら}を振_ふつて、

「否_い、不_ふ可_かない。君_{きみ}は其_その花_{はな}を見_みて煩_{わん}悶_{もん}し僕_{ぼく}は其_{その}刺_さを掴_{つか}むで罪_{つみ}を得_えたからね、」胸_{むね}の風_{ふう}雨_うも跡_{あと}なく晴_はれて、花_{はな}咲_さき鳥_{とり}歌_{うた}ひ、世_よは長_{なが}の春_{はる}なれや。

「左_さ様_{やう}ですか、」と云つた聲_{こゑ}も清_{せい}しく、何_{いづ}時_つしか雲_{くも}切_きれて、華_{はな}麗_{れい}に勇_{いさ}しく輝_{かが}きだした朝_{あした}の日_ひ影_{かげ}を受_うけた我_{われ}が陣_{ぢん}地_ちと、鉢_{はち}卷_{まき}山_{やま}の敵_{てき}壘_{るい}とを、交_は々_{ささ}打_{うち}ち見_み遣_やつた辰_{ちん}雄_{ゆう}の、威_ゐを合_あむた眼_{まなこ}の鋭_{えい}き、鼻_{はな}梁_{らやう}の通_{とほ}つた顔_{かほ}には、唯_{ただ}もすれば顯_あはれる死_しの相_{さう}の痕_{あと}も消_けえて本_{ほん}年_{ねん}二_に十_{じゅう}六_{ろく}歳_{さい}の、脊_せの高_{たか}は骨_{こつ}格_{かく}の逞_{たくま}しい全_{ぜん}身_{しん}を通_{つう}じて、其_それは生_い々_いした活_{かつ}氣_きが溢_あれて居_ゐた。勇_{いさ}まじき武_ぶ者_{しや}振_び。青_{あお}柳_{やなぎ}に渡_{わた}る風_{かぜ}も清_{せい}しや。

斯_かくて遠_{えん}藤_{とう}辰_{ちん}雄_{ゆう}と、松_{まつ}崎_{さき}俊_{しゆん}吉_{きち}の二_{ふたり}人_りは、二_に人_{にん}の名_なを連_{つら}ねた絶_{ぜつ}交_{かう}状_{じやう}をお千_{ちよ}代_よの許_{もと}に送_{おく}つて置_おいて、二_{ふたり}人_りは影_{かげ}の形_{かたち}に添_そふが如_{ごと}く、霧_{きり}地_ぢに旅_{りよ}順_{じゆん}の要_{えん}塞_{さく}目_め蒐_{さう}て進_{すす}むたのであつ

たが本年一月二日となつて旅順が陥落しても、三月十日に奉天が占領されても、二人の消息は、尙官報にも乗らなければ、新聞にも出なかつた。雖然、這麼事には、必ず悲惨な後談があるものである。

戀愛色即是空 終

明治四十年八月 印刷
明治四十年八月 日發行

著作
所有

著作者 田中桃葉
發行者 岩崎鐵次郎
印刷者 大場サ夕
印刷所 龍雲堂
東京市神田區南乘物町十五番地

色即是空
正價參拾五錢

發 兌

東京市神田區鍋町廿一番地
電話本局三〇六七番
振替貯金口座四五壹七

大 學 館

押川春浪君著

世界怪譚

全部六卷

正價各廿五錢 ● 郵稅四錢

寫真版挿入

第一編 奇人の旅行
(十二版)

第二編 世界武者修行
(四版)

第三編 空中大飛行艇
(六版)

第四編 怪人奇談
(六版)

第五編 魔島の奇跡
(六版)

第六編 續空中大飛行艇
(六版)

二十世紀の科學は、世界を驚かすほどの進歩を遂げた。その結果、人類はかつて知らなかった多くの事を知り、かつてできなかった多くの事をするようになった。その中でも、最も驚くべき事の一つは、空を飛ぶことである。かつては、空を飛ぶのは神だけの事とされていたが、今では、人類が空を自由に飛ぶことができるようになった。これは、人類の歴史において、最も偉大な進歩の一つである。

この書は、空を飛ぶというテーマを中心に、様々な奇譚を収録している。第一編「奇人の旅行」では、空を飛ぶ能力を持つ奇人たちの冒険が描かれている。第二編「世界武者修行」では、空を飛ぶ技術を習得するための修行が描かれている。第三編「空中大飛行艇」では、大規模な飛行艇の冒険が描かれている。第四編「怪人奇談」では、空を飛ぶ能力を持つ怪人たちの物語が描かれている。第五編「魔島の奇跡」では、魔島という神秘的な島での冒険が描かれている。第六編「續空中大飛行艇」では、前編の続編として、さらなる飛行艇の冒険が描かれている。

これらの奇譚は、押川春浪君の想像力と筆力によって、読者を魅了する。空を飛ぶという夢を、読者の心に刻み付け、その夢を現実にするための勇気と努力を、読者に伝える。これは、本書の最大の目的である。

羽化仙史著

冒險奇怪文庫

全部拾貳卷

正價各廿五錢 郵稅四錢

寫眞版挿入

第一編 生死冒險奇旅行

第二編 探險奇人の航海

第三編 新海底旅行

第四編 月世界探險

第五編 奇人の魔法

第六編 新ナポレオン

支那の娘、米國の丈夫、夫と契り、萬里の鵬程途に颯風に逢ひ、海上に溺す、丈夫失戀、此の間に結繩の縁始めて全ツカ國に戦つて、千粒の粉の疑に、此に結繩の縁始めて全

空前の奇妙な爆裂の發明者、絶海の寶島に隱る、扶桑國の士官、海賊の巨魁の秘箱を奪ひて、寶島に授け、波濤を蹴る、士官の折望、鏡に依り、遂に尋ねて、これを救ひ、遂に階を居る、娘の行跡を知り、遂に尋ねて、これを救ひ、遂に階を居る、

羽化仙史著

冒險奇怪文庫

全部拾貳卷

正價各廿五錢 郵稅四錢

寫眞版挿入

第七編 船幽靈

第八編 妖怪山の英雄

第九編 生？死？

第十編 空中電氣旅行

第十一編 食人國探險

第十二編 續食人國探險

船幽靈は何か、奇術を弄して海上に各國の船を擱め、人を殺し、財を掠む、世界各國の哲人、壯夫、相圖つて、帝國の海上に覇を擧げんとす、二人の少女、亦艱難辛苦、身敵地に入つて、仁王の巨人と生死を争ふ。

押川春浪君著 美術寫真版入(五版)

世界奇譚 新アラビヤナイト 第一編 價廿五錢 郵稅四錢

「アラビヤナイト」は天下の奇書にして苟くも小説を作るもの一讀せざる事なし本書はステウエンソンの原書を基として著者が例の豊富なる思想を流暢なる筆を以て綴りたるもの、趣味遙に「アラビヤナイト」の上

川押春浪君著 美術寫真版入(四版)

世界奇譚 へーグ奇怪塔 第二編 價廿五錢 郵稅四錢

奇怪塔あり、大戦亂を醸し、勇士の最期に及び、黒百合の發明となり、空前の大懸賞となり、將軍の幽霊を顯出するの奇譚を經し、絶無の美人が勇俠を緯す、原書は歐洲大評判の小説更に著者の想を加へ筆を振ふて此篇成る以て本書の趣味を知る可し。

押川春浪君著 寫真版挿入(六版)

航海奇譚 價廿五錢 郵稅四錢

大洋と言ふ已に快也、航海と言ふ已に壯也、奇譚といふに至つては已に競ふて讀まざる能はず、太平洋を馳る船、大西洋に沈む船、甲板に起りたる神出鬼没の活劇、奇絶にして趣味多く快絶にして感興甚だし、目(海上の怪、孤島の奇遇、幽霊島、海の奇婦人、海次(軍士官、無名の碑、俠血二人、男兒二人胡弓師)

押川春浪君著 美術寫真版入

世界奇譚 立身膝栗毛 第三編 價廿五錢 郵稅四錢

那翁が佛國兩皇帝となりし時、玉座の前に來つた一少年こそ本篇の主人公にて、其後那翁の批評の言に勵まされて、偉大の人物となりしや否やは彼れが運命の駒に跨つて奇なる人生の旅を試みし所の一語山あり、河あり、美人あり、冤城あり、人生の始にその面白き事皆も武者修行が世界各國を經廻り千變萬化の奇事に遭遇する事異ならず

宮崎來城君著 密畫寫真版入 (十三版)

無錢旅行 價廿五錢 郵稅四錢

旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、車に在らず、所謂徒歩無錢にして千山萬壑を跋涉するに在り、風を餐ひ露を飲み乞食と合宿するなど辛苦の中に忘られぬ趣味の存するものあり、此書世に出で、忽ち十數版を重ねたり以て如何に壯快なる讀物なるを知れ。

鐵脚子著 (密畫寫真版入) (再版)

一野宿旅行 價廿五錢 郵稅四錢

汽車の便を捨て自轉車の捷を藉らず膝栗毛に頼つて三個の風來浪が到る處に滑稽を演じ失策を惹起し而も豪放磊落一難に逢ふ毎に愈々勇を増し青天井に草枕天地の寂寞を破る胴羅聲は響ひ來たる數萬の蚊軍を退却せしめ一瓶の正宗に微酔機嫌往來狭しと大手を振つても流石野道の香氣此上もなき一讀噴飯滑稽無比の旅行記なり。

宮崎來城君著 (密畫寫真版入) (八版)

乞食旅行 價廿五錢 郵稅四錢

腹に萬巻の書を貯へながら旅行のしたさに鉄腕を片手に乞食の仲間入して彼處此處を經廻つた實歴談である、三日したら止められぬといふ乞食の境遇はどんなものであらうか來城氏の無錢旅行を讀んだ人はその趣味の多い事を悟るであらう。

鐵脚子著 (密畫寫真版入) (再版)

奇貧乏旅行 價廿五錢 郵稅四錢

腹中の空乏は辻堂に一泊して地蔵の慈悲を感じ橋を誤覚化して旅の憂さを悟り愈々進みて愈々究し愈々究して愈々勇を得此於て、奇談百出珍話續々として湧く一讀柔弱男子の懶眠を覺醒するに足るものあり。

羽化仙史著 (寫眞版挿入) (再版)

○小説 百難旅行 價二十錢 郵稅四錢

一難されば一難來り前門虎を防げは後門狼を迎ふ、幾度か宛に困み霹々災に遇ひ或は放狼或は漂流、水火の巷に出入し劔戟の間に馳驅す、一少年が豪勇と義膽とは讀む者をして感憤興起せしめずんばあらず寔にこれ冒險小説中の傑作。

加瀬花那氏著 (寫眞版挿入) (三版)

○モンゴリヤ妖怪村 價廿五錢 郵稅四錢

征露の役軍中より選まれて斥候として派遣せられたる三勇士が道を失ふてよりさまぐの怪事奇蹟に遭遇し或は虎に養はれ妖怪を退治し幽霊と談し危難に類し災厄に遇ひ遂に戦死せしと思はれし三勇士が恙なく歸つて大功を現はす快譚なり。

羽化仙史著 (寫眞版挿入) (再版)

○奇女無錢旅行 價廿五錢 郵稅四錢

一奇女あり容貌花の如く音聲玉を轉するが如し而も膽力蓋に有髯男子を凌ぐ囊中一錢の時になく英國、佛蘭西、獨逸、米國等歐洲大陸を跋渉し到る處奇談珍説の中心なる讀者幸に恍惚として自失せずんば幸なり。

米國 ミス、マロツク嬢原著 三浦天民君譯

○新空中旅行 價廿五錢 郵稅四錢

一王國の王子が王位に即き攝政の叔父のために位を奪はれ一孤塔の中に幽閉せられしに王子の降誕當時より不思議なる老婆顯はれ此に王子のために或は雲雀となり燕となり智識を増さしめ空中を飛行する等自在なる襪襪切れを與へ王子に故郷を眺めしめて自分を見せしめ遂に王位に還ると云ふ不思議なる少年小説なり。(三版)

松林伯知講演 (密書寫眞入) 太閤榮華物語(春の卷) 價三十錢 郵稅四錢

松林伯知講演 (密書寫眞入) 太閤榮華物語(夏の卷) 價三十錢 郵稅四錢

松林伯知講演 (密書寫眞入) 太閤榮華物語(秋の卷) 價三十錢 郵稅四錢

松林伯知講演 (密書寫眞入) 太閤榮華物語(冬の卷) 價三十錢 郵稅四錢

報知新聞連載 松林伯龍演 (寫眞版挿入) 古軍記 價三十錢 郵稅四錢

三宅青軒君作 (寫眞版挿入) 蒙古古軍記(後編) 價三十錢 郵稅四錢

三宅青軒君作 (寫眞版挿入) 蒙古古軍記(前編) 價三十錢 郵稅四錢

三宅青軒君作 (寫眞版挿入) 武道の神 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君作 (寫眞版挿入) 武道の神 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 武道の神 價三十錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 武士道の哲 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 武士道の哲 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 武士道の哲 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 武士道の哲 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 武士道の哲 價三十錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 鳥さし 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 鳥さし 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 鳥さし 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 鳥さし 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 鳥さし 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 鳥さし 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 鳥さし 價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫眞版挿入) 鳥さし 價廿五錢 郵稅四錢

藤原嶺葉著 小説 新婦の秘密 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	草の理作 小説 深山の夫婦 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	草の理作 小説 想の妻 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	須藤寒泉君作 小説 家の庭 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	生田葵山人著 小説 果の戀 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	羽化仙史著 小説 族の戀人 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	篠原嶺葉君著 小説 婚夫 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	篠原嶺葉君著 小説 腹華族 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	篠原嶺葉君著 小説 妾腹華族 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢
---	--	--	--	--	--	---	--	---

逆川樓主人著 小説 露子 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	福田琴月君著 小説 病將軍 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	陸月山人著 小説 窟の女 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	府南隱士著 小説 新クレオパトラ （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	府南隱士著 小説 新クレオパトラ （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	羽化仙史著 小説 命美人 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	羽化仙史著 小説 薄命美人 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	鹿島櫻巷君著 小説 装の怪人 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢
---	--	---	---	---	---	--	---

五峰仙史著 小説 道樂和尙 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	五峰仙史著 小説 空想病 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	五峰仙史著 小説 惚れ男 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	五峰仙史著 小説 滑稽女學生旅行 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	五峰仙史著 小説 滑稽女學生旅行 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	五峰仙史著 小説 滑稽東京見物 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	五峰仙史著 小説 滑稽遊學 （密書寫真入） 價廿五錢 郵稅四錢	早田玄洞君著 小説 膽力修行 （寫真版入） 價廿五錢 郵稅四錢
--	---	---	---	---	--	--	--

宮崎來城君著 小説 無錢旅行 （寫真版入） 價廿五錢 郵稅四錢	宮崎來城君著 小説 乞食旅行 （寫真版入） 價廿五錢 郵稅四錢	鐵脚子著 小説 野宿旅行 （寫真版入） 價廿五錢 郵稅四錢	鐵脚子著 小説 野宿旅行 （寫真版入） 價廿五錢 郵稅四錢	天涯歸客著 小説 北米無錢渡航 （寫真版入） 價廿五錢 郵稅四錢	五峰仙史著 小説 歸省旅行 （寫真版入） 價廿五錢 郵稅四錢	五峰仙史著 小説 抱腹滑稽旅行 （寫真版入） 價廿五錢 郵稅四錢	五峰仙史著 小説 洋行世界滑稽旅行 （寫真版入） 價廿五錢 郵稅四錢
--	--	--	--	---	---	---	---

鹿島櫻菴君著 (寫真版入)
●探奇 野原の怪邸
價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫真版入)
●探奇 不思議の娘
價三十錢 郵稅四錢

曉風山人著 (寫真版入)
●探奇 秘密の怪洞
價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻菴君著 (寫真版入)
●探奇 世界の秘密國
價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻菴君著 (寫真版入)
●探奇 無底湖の秘密
價廿五錢 郵稅四錢

鹿島櫻菴君著 (寫真版入)
●探奇 不死の靈窟
價廿五錢 郵稅四錢

正岡毅陽君著 (寫真版入)
●探奇 孤島の秘密
價三十錢 郵稅四錢

正岡毅陽君著 (寫真版入)
●探奇 續孤島の秘密
價三十錢 郵稅四錢

東北隱士著 (寫真版挿入)
●探偵 二人令嬢
價三十錢 郵稅四錢

加瀬花那君著 (寫真版挿入)
●探偵 へタゴニヤ仙窟
價十八錢 郵稅四錢

鹿島櫻菴君著 (寫真版挿入)
●探偵 美人島探險
價廿五錢 郵稅四錢

三宅青軒君著 (寫真版挿入)
●探偵 幽霊の寫真
價三十錢 郵稅四錢

河越輝子女史著 (寫真版挿入)
●探偵 怪美人
價三十錢 郵稅四錢

押川春浪君著 (寫真版挿入)
●探偵 千年後の世界
價廿五錢 郵稅四錢

二六新聞懸賞小説 (寫真版挿入)
●探偵 女優殺し
價三十錢 郵稅四錢

羽化仙史著 (寫真版挿入)
●探偵 妖姫の一生
價廿五錢 郵稅四錢

井上九權君編
●花嫁新 婚百話
價二十錢 郵稅四錢

河村扶桑君著
●武士道百話
價十五錢 郵稅四錢

長田偶得君著 (寫真版入)
●明治六十大臣
價三十錢 郵稅四錢

墨堤隱士著 (寫真版入)
●大臣の書生時代
價三十錢 郵稅四錢

矢野滄溟君著 (寫真版入)
●食客
價二十錢 郵稅四錢

池田錦水君著 (寫真版入)
●無錢修學
價廿五錢 郵稅四錢

墨堤隱士著 (寫真版入)
●青年人物の食客時代
價十八錢 郵稅四錢

墨堤隱士著 (寫真版入)
●商人豪商の雇人の時代
價十五錢 郵稅四錢

西山筑濱君著 (寫真版入)
●品性英雄の道樂
價二十錢 郵稅四錢

桐友散士著 (寫真版挿入)
●暗面夜の女界
價廿五錢 郵稅四錢

原田東風君著 (寫真版挿入)
●木賃宿
價廿五錢 郵稅四錢

池田錦水君著 (寫真版挿入)
●奧様と嬢様
價廿五錢 郵稅四錢

池田錦水君著 (寫真版挿入)
●婦人と戀愛
價二十錢 郵稅四錢

池田錦水君著 (寫真版挿入)
●境遇戀の解剖
價二十錢 郵稅四錢

池田錦水君著 (寫真版挿入)
●社會戀の婦人氣質
價三十錢 郵稅四錢

池田錦水君著 (八版)
●社會女心の解剖
價三十錢 郵稅四錢

長田偶得君著
●妖奇談
價十五錢 郵稅四錢

平井川南君著 (寫真版入)
滑稽大寄席

價廿五錢
郵稅四錢

嬉苦樓千萬著 (寫真版入)
滑稽落語集

價十五錢
郵稅四錢

宮崎來城君序 軒渠道人著
笑百話

價十五錢
郵稅四錢

機川老福著
機智頓智百話

價十五錢
郵稅四錢

哄笑子著 (寫真版入)
滑稽大集會

價十五錢
郵稅四錢

可笑樓喜樂著
滑稽大笑種本

價十五錢
郵稅四錢

甘藷子著 (寫真版入)
放屁百話

價十五錢
郵稅四錢

櫻子著
軍人頓智叢談

價十五錢
郵稅四錢

笑門福來著
滑稽落語珍話會

價十五錢
郵稅四錢

野狐狂禪著 (寫真版入)
一休和尚頓智笑話

價十五錢
郵稅四錢

天賴居士著 (寫真版入)
大久保彦左衛門笑話

價十八錢
郵稅四錢

南圖生著 (寫真版入)
曾呂利新左衛門笑話

價十八錢
郵稅四錢

圖書狂生著 (寫真版入)
大岡越前守頓智談

價十五錢
郵稅四錢

尾花庵二十坊主著 (寫真版入)
水戸黃門奇行談

價十八錢
郵稅四錢

尾花庵二十坊主著 (寫真版入)
大笑下女百話

價十五錢
郵稅四錢

年小僧與太郎著 (寫真版入)
大笑小僧百話

價十五錢
郵稅四錢

十返舎一九著 尾花庵二十坊主著 (寫真版入)
東海道膝栗毛

價十八錢
郵稅四錢

十返舎一九著 尾花庵二十坊主著
滑稽東海道膝栗毛

價十八錢
郵稅四錢

魔術古武士著
妖怪百話

價十五錢
郵稅四錢

篠原嶺葉君著 (密畫寫真入)
新不如歸

價三十錢
郵稅四錢

篠原嶺葉君著 (密畫寫真入)
ハイカラ令嬢

價三十錢
郵稅四錢

篠原嶺葉君著 (密畫寫真入)
ハイカラ令嬢

價三十錢
郵稅四錢

篠原嶺葉君著 (密畫寫真入)
可憐嬢

價三十錢
郵稅四錢

篠原嶺葉君著 (密畫寫真入)
可憐嬢

價三十錢
郵稅四錢

篠原嶺葉君著 (密畫寫真入)
戀の妻

價三十錢
郵稅四錢

花園小史著 (密畫寫真入)
戀の妻

價廿五錢
郵稅四錢

花園小史著 (密畫寫真入)
戀の妻

價廿五錢
郵稅四錢

無名氏著 (密畫寫真入)
か不貞か

價三十錢
郵稅四錢

草の人著 (密畫寫真入)
夫の行路

價廿五錢
郵稅四錢

草の人著 (密畫寫真入)
夫の行路

價廿五錢
郵稅四錢

草の人著 (密畫寫真入)
夫の行路

價廿五錢
郵稅四錢

草の人著 (密畫寫真入)
夫の行路

價廿五錢
郵稅四錢

草の人著 (密畫寫真入)
夫の行路

價廿五錢
郵稅四錢

草の人著 (密畫寫真入)
夫の行路

價廿五錢
郵稅四錢

池田錦水君著 (密畫寫真入)
戀の一年有半

價廿五錢
郵稅四錢

池田錦水君著 (密畫寫真入)
戀の一年有半

價廿五錢
郵稅四錢

池田錦水君著 (密畫寫真入)
女學生氣質

價廿五錢
郵稅四錢

池田錦水君著 (寫真版入) (三版)

○無錢修學 (價廿五錢 郵稅四錢)

本書の目的は青年が苦學力行を奨励するに在り、因循姑息の念を除去するに在り 獨立自活の法を教ふるに在り 或は新聞配達となり 立坊となり 貸家搜となり、托鉢坊主となり 車夫となり 苦心困難の境遇を小説的に描に出す 附録學生自活法

早田玄洞君著 (寫真版挿入) (五版)

○膽力修行 (價廿五錢 郵稅四錢)

風雨の暗夜荒神社廢寺を探り、刑場古墳を尋れて膽力を煉磨したる實歴を描寫せるもの目次を一讀し如何に本書の趣味饒多にして練膽の道に益あるかを知る可し曰く人魂曰く古寺、化地蔵、古刑場、水垢離、丑の刻、古城の椿、隈宵の一夜、食人怪、死人、青面鬼等三十六項に分つ附録として釋宗演禪師の座禪工夫を載す

加瀬花那君著 (寫真版入)

○探險へタゴニヤ仙窟 (價十八錢 郵稅四錢)

本書は名門に生れし硬骨男子が威勢に屈せず奮然として故郷を後にし芝の如く美に才智膽力有智男子を凌ぐ妙齡の美人と相携へて萬里遠征の途に上り道に一箇の魁丈夫と逢ひ南洋の黄金窟を探險するの奇々妙々の珍小説

矢野沱浪君著 (寫真版入) (三版)

○食客 (價二十錢 郵稅四錢)

本書は著者が實驗せし事柄を言文一致を以て描かれたるものにして食客が辛酸困苦の境遇不平憤懣の生活讀むものをして身その中に在るの感起さしむ塞に近時片々たる駄小説に比して趣味優ること數番なるのみならず苦學の書生に慰樂を與ふること甚だ多し。

